Ⅲ 石 室

1 玄 室

安全管理　石室奥壁寄りの天井石が不安定な状態で残存しており、そのままの状態で石室内を掘り下げることは危険であったため、調査は一部を解体して行うことにした。安全管理業務を委託し、資格と経験を持った安全管理要員１名を常駐させる体制で臨んだ。以下に講じた安全策とその目的を記す。

クレーン搬入路　天井石は６ｔを超えることが予想されたため、これを吊揚げるためには25ｔクレーンを吊り位置から10m以内に着ける必要があると判断された。そこで、クレーン車搬入のための仮設道路を客土により敷設し、アウトリガー設置位置には敷鉄板鋼で養生した。

写真28　石室残存状況　着手前

写真29　Ｈ鋼の設置及び評定点測量　南から

写真30　吊揚げ作業　天井石

Ｈ鋼設置　石室の周囲に、30㎝角、長さ２ｍのＨ鋼を数段井桁組みしたものを８基設置し、石材養生のためのチェーン等の固定端として、また単管パイプで組み上げる仮設覆屋の基礎とした。

仮設覆屋と養生シート　単管パイプで覆屋を組み上げ、コンパネで屋根を葺いた。また、石室の周囲をブルーシートで覆い、屋根から垂れる雨水を墳丘下方へ排水するように工夫した。水分が石室周り（特に墓壙内）に浸潤することによって石材に浮力が生じることを防ぐためである。

復旧用評定点測量　天井石及び天井石が外れることによって不安定化することが予想される石材の一つひとつに複数箇所の評定点を設けて、座標及び標高の測量を行い、復旧に備えた。

吊揚げ作業　不測の事態に備え、Ｈ鋼に単管パイプを渡し、緩衝材を噛ませて壁体を養生した。いざ天井石を吊揚げてみると、特に心配された奥壁上段の石材を含め自立していた。しかし、念のため天井石以外に７つの石材を取り外し、安全確保に万全を期した。因みに天井石は、クレーン車載重量計が6.5ｔを示した。

石材動静管理　調査期間中、観測機械点を固定し、毎日測量して石材の変位量を㎜単位で監視した。

玄室内流入土　玄室の埋没過程を調べ、かつその情報を温存するために、主軸方向(Ｅ－Ｅ')とそれに直交する２本(Ｂ－Ｂ'、Ｃ－Ｃ')のセクションベルトを設けた。その内、Ｂ－Ｂ'の西側については、作業スペースを確保するため記録しながら掘り下げたため、現状では残っていない。また、Ｅ－Ｅ'の南半部は、第１次調査の清掃により失われた部分から下を残した(図18)。天端で幅25cmを取ったが、崩壊を防ぐために法を付けたため、床面に到達するころに(約２ｍ下で)は幅約１ｍとなった。

下層から見ていくと(図19)、礫床に直接積もった黄色ないし黄橙色で砂礫混じりの砂質土(Ⅳ層)が、壁面の裾から中央に向かって斜めに堆積していた。この層は床面の中央部には及んでいない。壁体の裏込めに使われた墓壙内の埋土が石材の隙間から流れ出た初期の流入土とみられる。

次に、黒色系の土(Ⅲ層)が床面から70cm～1.3m程の高さまで堆積していた。玄門の東側、すなわち玄室の南東角部から対角の北西方向へ流れ込んだ様子が観察された。Ⅲ－1を穿った浅い土坑(SK3)から山茶碗(４)が出土したことから、鎌倉時代(13世紀前半頃)までには埋まっていたと考えられる。これにより、それ以前の段階で玄室南東角部から、これ程の土砂を流入させる程の穴が開いていたことが判る。なお、Ⅲ－2を穿つ土坑(SK6)から、鉄地金銅張飾金具(２)が出土した。

次に黄色系の土(Ⅱ層)がⅢ層の堆積の薄いところでは１ｍ、厚いところでは50cmほど堆積し、上面をほぼ水平にしている。Ⅲ層より長い年月をかけて徐々に堆積した様相を示し、深いところから浅いところまでに(Ⅱ－5,4,2を穿った)浅い土坑(SK2,1,7)が複数検出された。

唯一残る天井石の下には空閑が残されていたが、その他は完全に埋まり、上部は竹の根が20～50cmの深さまで蔓延していた(Ⅰ層)。

写真31　Ｂ'－Ｂ　断面　奥壁側から

写真32　Ｃ－Ｃ'　断面　玄門側から

写真33　Ｄ'－Ｄ　断面　奥壁側から

写真34　Ｅ－Ｅ'　断面　西壁側から

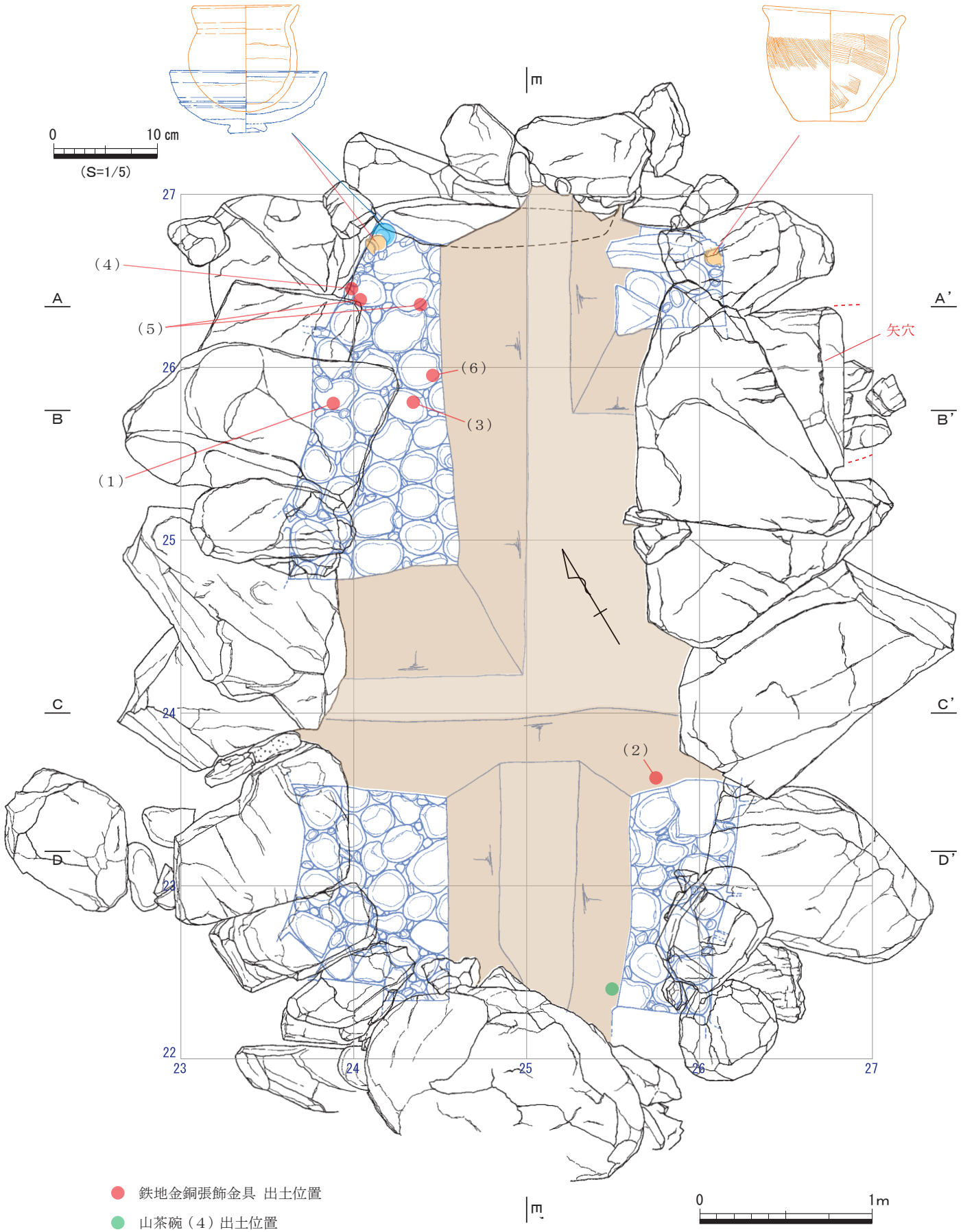
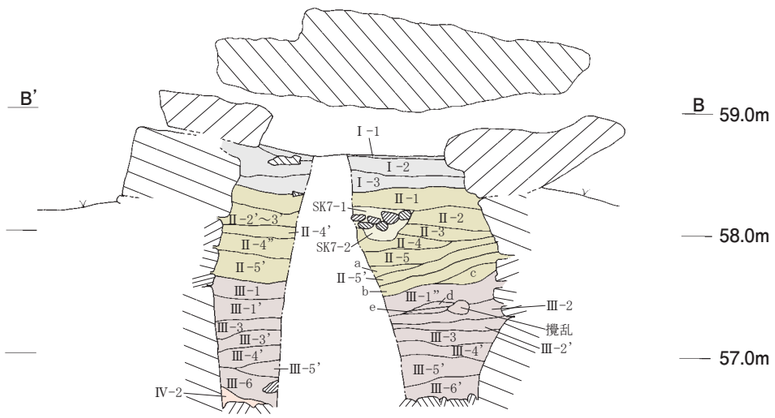
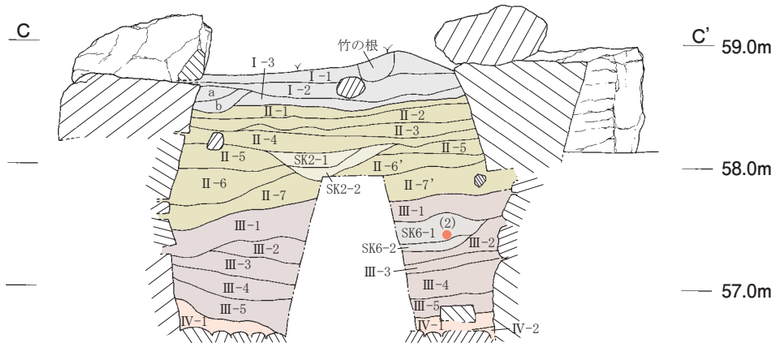


図18　玄室完掘平面図（S=1/30）





断面B'－B

表土層

Ⅰ-1　茶褐色やや粘質土　φ１～２㎝の礫を少し含む。
Ⅰ-2　茶褐色やや粘質土　竹根が蔓延し、締まり弱。φ0.5～１㎝の礫を含む。
　　人頭大の円礫が多く混入する。
　　※1948年（昭和23）以降に石材の持ち出しが行われたが、それ以降の投げ込みとみられる。
Ⅰ-3　茶褐色土　竹根が蔓延し、締まり弱。φ５～６㎝の角礫を多く含む。
SK7-1　茶褐色やや粘質土　円礫が入り、締まり無し。
SK7-2　灰茶褐色土に黄色粒が全体に混ざり、締まり強。

黄色系

Ⅱ-1　茶褐色土　タニシの殻を多く含む。※子どものいたずらか。
Ⅱ-2　茶褐色土に黄色粒が多く混ざり、締まり弱。
Ⅱ-3　明黄茶褐色土　φ５㎜の砂礫が多く混ざり、締まり強。
Ⅱ-2'～3'　茶褐色土　φ１～２㎜の黄橙色粒がを多く混ざる。
Ⅱ-4　黒褐色土に黄色粒が混ざり、締まり弱。φ0.5～１㎝の礫を所々に含む。
Ⅱ-4'　黒褐色土に黄色粒が全体に混ざり、締まり無し。φ２～５㎜の礫を多く含む。
Ⅱ-4"　黒褐色土に黄橙色の礫が多く混ざり、炭粒が少し混入する。
Ⅱ-5　黄褐色土と暗茶褐色土が混ざり合い、締まり弱。φ１～２㎜の礫と黄色砂粒を全体に含む。
Ⅱ-5'　黒褐色土　φ５㎜の礫を多く含み、締まり弱。Ⅲ-1に比べて明るい色調。
　　北寄りは、黄橙色やや砂質土。
a　黒褐色土　締まり弱。（部分的な流入）
b　黒褐色土と茶褐色土が混ざり合う、やや粘質土締まり弱。（部分的な流入）
c　ｂに似るが、締まり強。（部分的な流入）
d　黒褐色土に白色粒が混ざる。（部分的な流入）
e　均質な黒褐色土　締まり弱。（部分的な流入）

黒色系

Ⅲ-1　黒褐色土　φ３～４㎝の黄色土ブロックが所々に入る。
Ⅲ-1'　東壁寄りは、茶褐色土に黄色粒が全体に混ざり、締まり弱。φ５㎜の礫を含む。
　　中央寄りは、黒褐色やや粘質土　締まり無し。
Ⅲ-1"　黒褐色土　所々にφ１～２㎝の礫を含む。
Ⅲ-2　黒褐色土　きめの細かい土で、締まり強。
Ⅲ-2'　黒褐色土　φ３～４㎝の礫を含む。
Ⅲ-3　黒褐色土に黄橙色土が混ざり合う。φ１～２㎝の礫を全体に多く含み、締まり弱。
Ⅲ-3'　-3より黒みが強い。
Ⅲ-4'　黒褐色土と黄橙色土が混ざり合い、やや粘質で締まり強。
Ⅲ-5'　黒褐色やや粘質土　締まり強。
Ⅲ-6　茶褐色土　φ１㎝の礫を多く含み、締まり無し。

初期の流入

Ⅳ-2　黄橙色粘質土に黄色砂礫が混ざる。

断面C－C'

表土層

Ⅰ-1　茶褐色土
Ⅰ-2　茶褐色土と礫混じりの黄褐色土が混ざり合う。人頭大の円礫が多く投入されている。
Ⅰ-3　黒みのある暗褐色土にφ５㎜の礫を多く含む。
a　暗褐色土に黄色粒が多く混じる。φ５～６㎝の角礫を多く含む。
b　ａに似るが、締まり強。

黄色系

Ⅱ-1　明黄橙色やや粘質土　締まり強。部分的にφ１㎝の礫がかたまって入る。
　　西へ行くほど明るい色調。
Ⅱ-2　暗茶褐色土　締まり弱。西へ行くほど明るい色調。
Ⅱ-3　-2より明るい暗茶褐色土に黄褐色土が混ざり、締まり強。
Ⅱ-4　明黄褐色土にφ５㎜の礫が混ざり、締まり強。
SK2-1　茶褐色土に黄橙色土が少し混ざる。φ0.5～１㎝の礫を多く含み、締まり弱。
SK2-2　茶褐色土と黄橙色土が混ざり合い、締まり弱。
Ⅱ-5　黄橙色土茶褐色土が混ざり合い、締まり弱。φ５㎜の礫を含み、東へ行くほど明るい色調。
　　西壁寄りはφ１㎝の礫を多く含む。
Ⅱ-6　茶褐色土に黄色や黒褐色土が所々に混じる。礫は少ない。根が蔓延している。
Ⅱ-6'　-5に似るが、中央付近が黒みを帯びる。-6と同様に根が蔓延している。φ１～２㎜の礫混じり
　　黄色土ブロックが所々に入る。
Ⅱ-7　-6に似るが、φ１㎝の礫が混じり、西壁寄りは黒みを帯びる。
Ⅱ-7'　茶褐色やや砂質土　締まり強。東壁寄りにφ１～２㎝の礫を多く含む。拳大の角礫も落ち込んでいる。

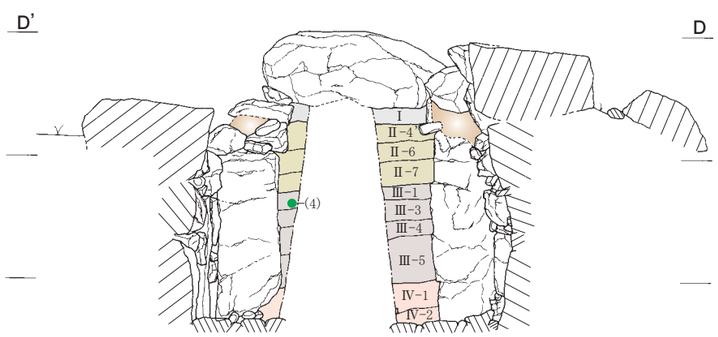
黒色系

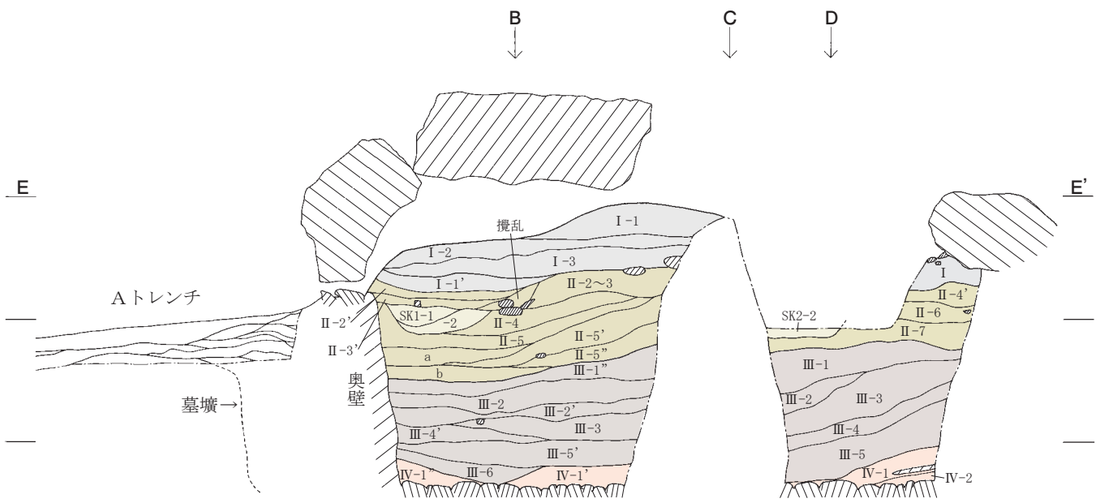
Ⅲ-1　黒褐色と茶褐色土が不均質に混ざり合う。締まり強。西壁寄りに、φ５㎜の礫を多く含む。
Ⅲ-2　茶褐色砂質土に黄色粒が混ざる。東壁寄りはφ１～２㎝の礫を多く含み、西へ行くほど黄色土の
　　混ざりが少なく、黒みを帯び、粘性を増す。
SK6-1　暗茶褐色土に黄色土ブロックが入り、締まり弱。φ１～２㎝の礫が所々に混じる。
　　※鉄地金銅張飾金具（2）№341が出土した。
SK6-2　黒褐色土　締まり弱。黄色粒が少し混ざり、やや粘質。
Ⅲ-3　暗茶褐色土　部分的にφ１～２㎜の黄色粒が多く混ざる黄橙色土が入る。
Ⅲ-3'　茶褐色やや粘質土　黄色粒の混入が少ない。東壁寄りは、礫の混入が多い。
Ⅲ-4　暗褐色やや粘質土　締まり弱。黄色粒が全体に多く混ざり、φ１～２㎝の礫を多く含む。
Ⅲ-5　暗褐色土に黄色粒が全体に混ざり、締まり強。所々にφ１～２㎝の礫を少し含む。
　　上層寄りは、やや粘性を帯びる。

初期の流入

Ⅳ-1　黄色土と茶褐色土の混ざり合い、締まりは弱いが粘性を帯びる。φ１～２㎝の礫を多く含む。
Ⅳ-2　黄褐色砂質土　締まりの無い、粗い土。φ２～３㎜の礫を含む。

断面D'－D（B・C・E参照）





断面E－E'（B・C参照）

表土層

Ⅰ　茶褐色土　竹根の蔓延が著しい。

黄色系

Ⅱ-2'　黄褐色土にφ１～２㎜の黄橙色粒が混ざり、
　　締まり強。
Ⅱ-3'　茶褐色土　φ６～８㎝の角礫を含む。
SK1-1　茶褐色土にφ８㎝の黄橙色土ブロックが入る。
SK1-2　茶褐色土　φ６～８㎝の角礫を含む。
Ⅱ-4'　黒褐色土　φ５㎜の礫を含む。
Ⅱ-5"　黄色土と暗褐色土が混ざり合う。
　　φ0.5～１㎝の礫を多く含み、締まり弱。

初期の流入

Ⅳ-1'　暗茶褐色土　黄橙色土が混じる。
　　φ１～２㎝の礫を含み、締まり弱。
Ⅳ-2"　黒褐色土　φ１～２㎝の礫を含み、
　　締まり弱。

0　2m

図19　玄室土層断面図（S=1/50）

写真35　床面正射投影画像（S=1/30）

石室の形態　南西方向に開口する石室で、全長10.29m[*1]、羨道は入口に向かって「八」の字形に開く。

羨道と玄室の連結は両袖式で、角材形の石材（袖石、玄門立柱石とも呼ばれる）により玄門を成す。玄門に架け渡された石材（楣石）は袖石には直接架からず、小さめの石が数段介在して、玄室はそこから一段高くなる。

玄室は、中央部の幅が最も広くなった「胴張り[*2]」で、長さ4.32m、高さ約2.5m、最大幅2.66m。持ち送り気味に架構されるが、いわゆる典型的な「持ち送り」とは異なり、石材の斜めの面を上手く内側に向けて、天井に向かって窄まる形にしている。さらに奥壁２段目の巨石も内側に曲面を向け、見事なブラインド・アーチ構造を採っている。

写真36　玄門

写真37　玄室完掘状況　北から

＊1 玄室及び羨道（前庭部を含む）それぞれの主軸に沿って計測。
＊2 床面も側壁も中ほどが膨らむ徳利形。

床面　床面の検出は、想定される面積の30％程[*1]にとどまったが、直径20㎝前後の扁平な川原石を敷き詰め、隙間に５㎝大の円礫を込めて整えられた美しい礫床であることが確認できた。

側壁に沿わせて敷き並べた列を手始めとして、内側へ１列ずつ敷き足していった作業手順を南北方向の目地に看取することができる。さらに目を凝らすと、斜め方向にも目地が通るように調整された様子も判る。これは、床面は奥壁から玄門へ向かって低くなっており、目地をつたう水を側壁方向へ掃き出す効果が期待されたものだろう。

玄室の床面は南西の隅が最も低くなっており、水は最終的にここ(写真35▲)に集まると思われる。南西の隅は南東の隅の構造とは異なり、側壁と袖石が直角に出合わず、斜めに架け渡された石材が介在する。排水が周到に計画されていたと考えられることから、さらに穿てば、この外側に排水施設(暗渠)が取り付いていることが推測される。

写真38　奥壁下部

写真39　左(西)側壁　奥壁側

写真40　左(西)側壁　玄門側

奥壁　奥壁下部の最も大きい石材(鏡石)は、最大高約1.8m(地上)、幅は約1.8mあるが、奥壁の幅約２ｍには届かず、幅約40㎝、高さ約1.6m(地上)の石を傍らに立て、奥壁の幅を満たしている。鏡石の厚みは約20㎝～30㎝(推定)と薄く、上部の石を据えるために背後に別の石が補われており、調査のために一旦外した２段目の奥壁は、それらの上に載せられていた(写真38)。

奥壁と側壁　両側壁は奥壁に押し当てられている。特に左(西)側壁は、鏡石の斜めになった側面に沿わせており、その成す角度は直角になっていない。鏡石が少し小さかったことが影響しているように思われる。しかし、全体としては、胴張りの形状にさほど違和感を与えるものではなく、むしろ次の工程を見据えて、はじめからこの形状を利用することを意図して据え方を決めたと考えられる。失われた北西隅上半部の石遣いは、鏡石の側面のカーブと側壁のアーチが一致していたに違いない(写真39)。

墓壙内の石積工　側壁には、床面から1.1m(標高57.8m)前後の高さで横目地が通っており、床面の傾斜に呼応して、南へ徐々に低くなる(図20)。

＊1　検出床面積3.48㎡／推定総床面積10.86㎡

取り外した石
原位置を保っていない石（復元）
59.0m
58.0m
57.0m
A'
B'
C'
D'
A
B
C
D
墓壙
57.857
57.888
57.901
57.854
57.824
0
3m

図20　石室実測図（S=1/50）

一番下に据えられたやや大きめの石材(腰石)は、高さ１ｍ(地上)程の巨石が用いられているが、目地までは届かず、さらに小さめの石材を載せてこの高さに調整している。この背後には、石室構築のために設けた穴(墓壙)があり、目地は墓壙が掘り込まれた地山の高さを反映していると思われる。Ａトレンチ及び奥壁左側(玄室北西隅)の石材が失われていた部分において墓壙のラインを平面的に確認した。これによると、検出した高さは、標高57.9～57.8mを示し、壁体の観察による目地の高さとほぼ一致する。西トレンチ(図４　断面図)では、墓壙の下がり端は標高57.5mとやや低く、目地までの高さを調整した小さめの石材の背後は盛土で押さえている様子が判る。墓壙の上端(もとの地形)に起伏があったことが想定されるが、この目地は総じて高さを減じながら羨道部まで続いている。

写真41　左(東)側壁　玄門側

墓壙内での石積工はこの高さまでであり、これより上へは、再び巨石を用いて２段積んだ後、天井石が架構されている。

地上の石積工　目地から上の最初の石材は、地山を滑らせて運び、長手方向を玄室主軸と直角方向に使って小口面を壁面としている。長さは墓壙を超え、およそ半分を地山に架けて外側への引きを持たせている。露出した石材を外側から観察すれば、この様子がよく判る(図18 ただし、断面Ｂ－Ｂ'東側のこの工程に関わる石材には、最近割って持ち去られた形跡(石割り矢穴)がある)。

これ以降の作業は、墳丘盛土の工程と不可分の関係にあり、壁体を押さえながら墳丘外側へも盛土が施される過程をＡトレンチで確認した。[*1]

玄門　玄門の両側に立つ柱石(袖石)は玄室側の面を揃え、羨道が開く方向を規定している。羨道主軸は玄室主軸とは異なり、南を基準に約７°西に傾いている。

羨道と玄室の連結部の石遣いをみると、墓壙内と地上の工程を分ける横目地を寸断する形で縦目地が天井部まで通っている。これは玄室主軸を採った立面図には表れにくいが、写真40・41と写真42で観察を補完するとよく判る。

写真42　袖部縦目地の上部　南東隅・南西隅

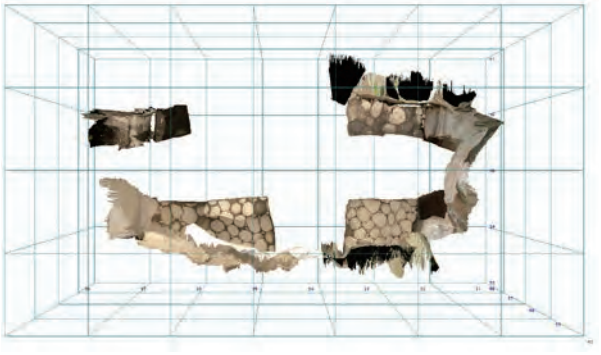
この現象は、袖石を立てて(羨道の方向を定めて)から、玄室と袖石との間に石材を充填して玄室が完成したことを意味している。玄室と羨道主軸のズレはこの部分が吸収しているのである。玄室

＊1 Ⅱ墳丘 ２第２次範囲確認調査「Ａトレンチ」p.20

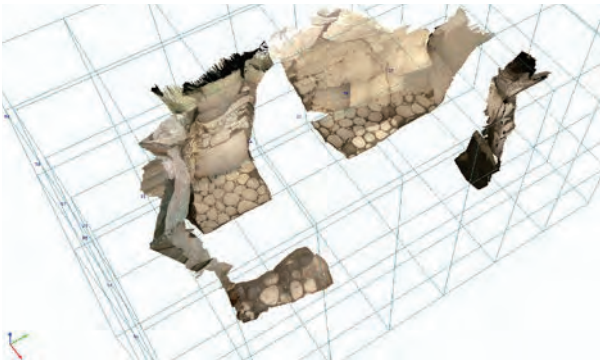
内流入土に見られた南西角部からの大量の土砂(Ⅲ層)の流入[*1]を許したのは、この部分の脆弱な構造が原因したものと推測される。

天井石　玄室と羨道の連結後、玄門に楣石が載り、最後に天井石が架け渡されて石室は完成を見た。長径3.3m、短径(玄室主軸方向)1.9m、厚さ57㎝の天井石が、奥壁寄りに１枚残っていた。床面から天井までの高さは約2.5mを測る。調査時は、安全確保のため一旦取り外したが、クレーン車載重量計は6.5ｔを示した。

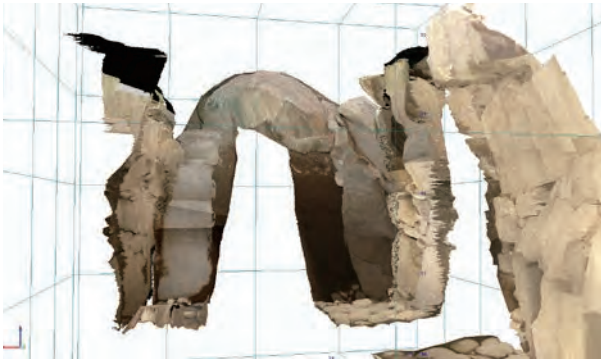
３次元測量　本来、３次元レーザースキャナ[*2]計測は対象面に正対させ、一定の距離をおいて計測することが望ましいが、玄室内に残したセクションベルトにより、一部の対象面に正対させることが困難であったため、主に斜め上から壁面・床面を見下ろす形で行った。石材の重なりにより死角が生じることによる情報量不足が不可避であったため、同時に３Ｄ画像計測を行いこれを補うことにした。２つの方法を組み合わせることによって、精細な色情報を３次元モデルに反映させることができた。



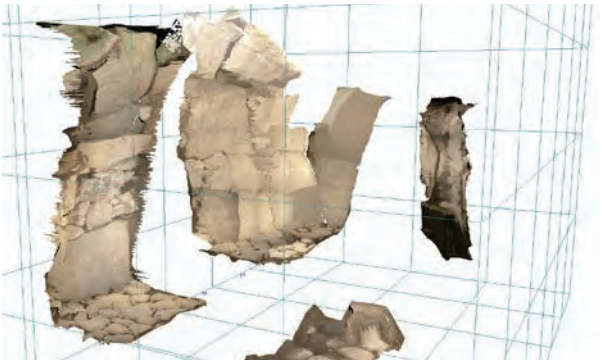
俯瞰



斜め上から



内部から玄門を望む



内部から奥壁を望む

写真43　３Ｄ画像[*3]

＊1 Ⅲ石室　１玄室「玄室内流入土」p.32
＊2 使用機材は、TOPCON GLS-1500(３次元レーザースキャナ)及びImage Master Pro(３Ｄ画像計測統合ソフトウェア)である。
＊3 投影法の切り替えや視点を自在に変えることができる。また、任意断面描画、体積・質量計算、ＧＰＳ(測位網)と連動したＡＲ(拡張現実)に活用できることなど有用性が高い。

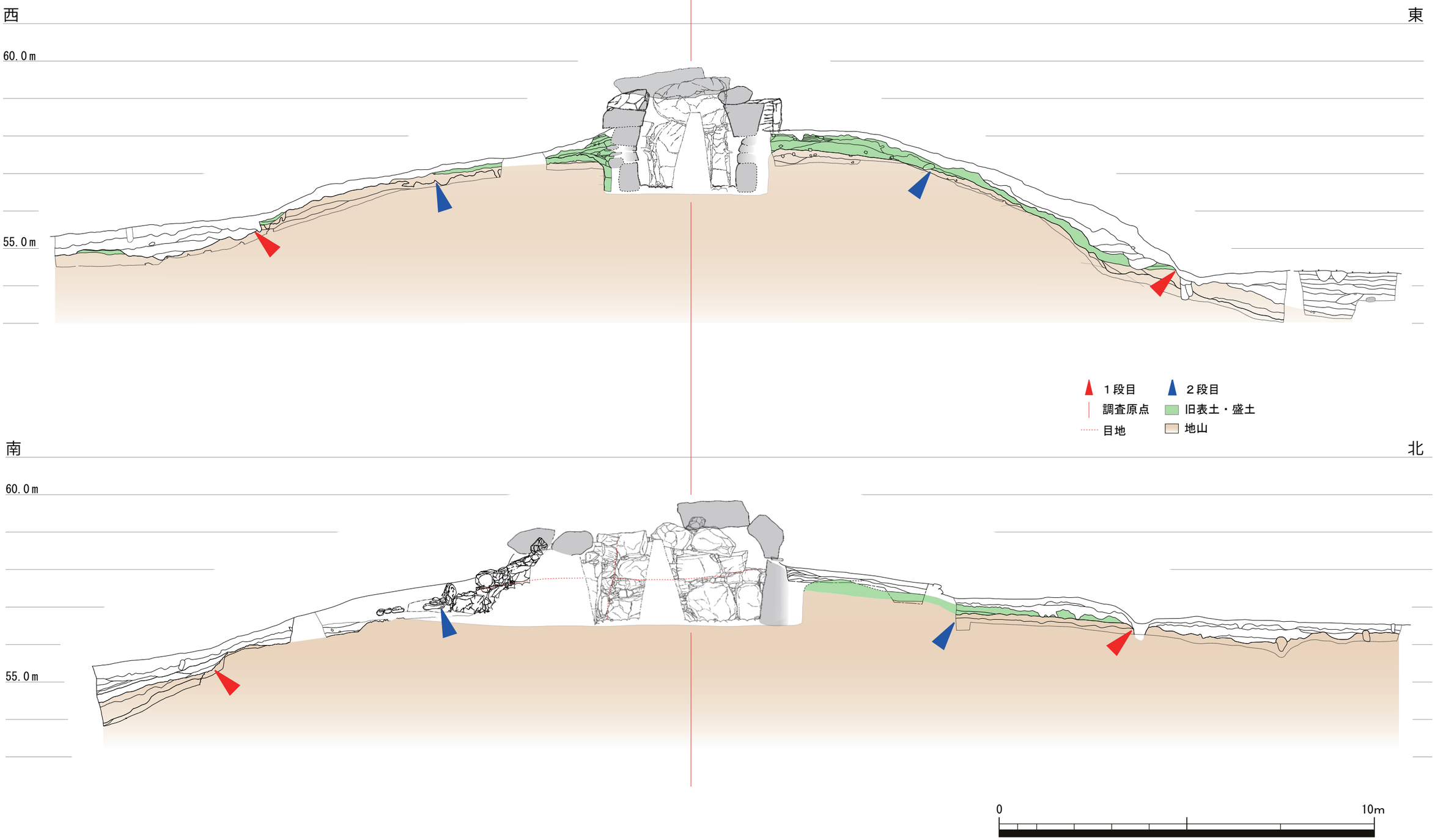


図21　墳丘・石室　縦・横断面図（S=1/100）

2 遺 物

玄室床面の奥壁と側壁が出合う両角に、土器が埋設されていた。左(西)の角からは、土師器の小壺(1)と須恵器のつまみ付き蓋(2)が、右(東)角からは、土師器の小甕(3)が出土した。前者は、礫を張り残した床面に、つまみを下にして埋められた蓋(2)が丸底の小壺(1)を受けていた。後者は、平底の小甕(3)が口縁部まで完全に埋められ、口縁部の一部が奥壁下部から剥離して、前倒しになった石材に押しつぶされた状態で出土した。礫床を整える段階で埋められた床面の構造の一部であり、後から副えられたもの、すなわち副葬品ではないことは明らかである。奥壁のどちらかの角に土師器の壺が埋められる(或いは、置かれる)例は、尾張北部から美濃、近畿の一部に分布が知られるが、[*1] 一般的な儀法ではなく、また両角に据えられる例は稀である。[*2]

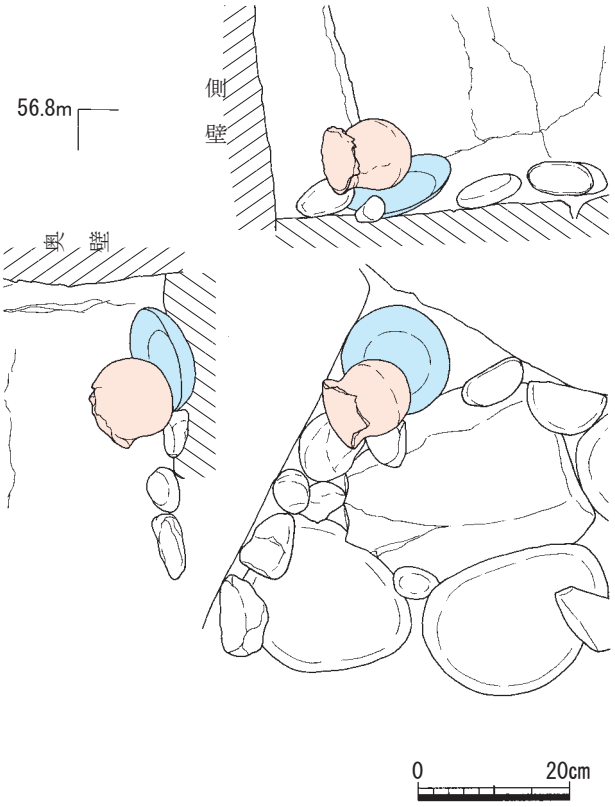


図22 土師器(1)・須恵器(2) 出土状況図 (S=1/10)

写真44 土師器(1)・須恵器(2) 出土状況

写真45 土師器(3) 出土状況 左が奥壁(剥離)

(1)は、口縁部径・器高共に10cm。丸い胴部から緩やかに外反する口縁部を持ち、頸部は指で押さえて僅かに窪ませている。胴部外面はヘラ状の工具で成形されたと思われるがナデ消され、内面底部にのみ、その工具痕(幅1.3cm)を残している。頸部から口縁部、胴部内面の3分の1程(親指の届く範囲)まで横ナデで仕上げている。

*1 深谷 淳 2011「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」『古代学研究』第189号 古代学研究会
渡来系氏族との関わりが論じられている。
*2 土師器の坏が伏せて置かれた平城古墳群(静岡市)の7基が知られるのみ(深谷氏のご教示による)。
静岡市教育委員会 1992『平城遺跡・平城古墳群1』, 1995『平城遺跡・平城古墳群2』

（２）は、径14.5cm、器高5.5cm。器胎が厚く重量感があり、内外面に焼き膨れが生じている。径8.5cmの重ね焼きの痕が天井部外面に残る。中心が凹む扁平なつまみが付き、肩部には沈線を回らせ、天井部と口縁部の境を分けている。しかし、そこからの屈曲はわずかであり、緩やかに口縁端部に至り、内面も天井部に向かって湾曲の度合いを少しずつ緩めながら、全体としては椀形となる。天井部内面に、土師器で言うところのハケ目が施されていることが特異な特徴として注目される。[*1] 石室の特徴から判断される年代観（７世紀前葉）[*2]からすれば、少し古い特徴を示しているが、床面の構造の一部である点を重視すれば、丸底の小壺を受けるために椀形の形状が求められた結果、この蓋が選ばれたと考えられる。

（３）は、口縁部径13.5cm、底部径6.5cmの平底で、胴部は底部から八の字形に開き、器高9.5～10.5cm。口縁部は少しだけ窪んだ頸部から緩く外反する。器胎が厚く、重量感があり、底部には葉脈の圧痕がある。外面の中ほどまで下方へハケ調整、内面は口縁部から縦に差し入れたハケの当たりはじめが放射状に強く残り、口縁部に近くなるに連れて角度を減じ、斜め方向のハケ調整が施されるが、頸部から口縁部（親指・人差し指の第１関節までが届く範囲）は、ナデ消されている。

なお、奥壁の基へ土師器を据える行為の意味を考える手掛かりを求めて、（１）と（３）の器内に残された土壌の分析を試みたが、目覚ましい結果は得られなかった。[*3]

（４）は、玄室内流入土Ⅲ－1を穿つ浅い土坑（SK３）から出土した山茶碗である。口縁部径15.7～16.0cm、底部糸切り部径8.5cm、高台径8.0cm、器高4.8～5.1cm。外側へ押しつぶされたような低い高台が、中心から少しズレて貼り付けられているため、片側の腰部にロクロから切り離したままの稜線が目立つ。体部は高台脇から直線的に「八」の字形に開き、口縁端部は外反せず、見込み部は曲面である。

写真46　山茶碗（４）出土状況

玄室内のⅢ層は、玄室と羨道の連結部の構造的に弱い部分の崩落が原因で、玄室の中ほどまで流入した黒色系の土であるが、山茶碗（４）の出土によって、この層は鎌倉時代（13世紀前半頃）までには既に埋まっていたことが判る。

なお、高台の内側に墨書がある。「万」か「ろ」（呂）の可能性がある。

表３　出土遺物

図版		年次	種別	器種	出土地点	遺構・層位	取上番号	残存の程度	備考
23	1	MI2	土師器	小壺	W-N 区	石室内，(2)の上に載る	359，360	口縁部一部欠損	黄橙色
23	2	MI2	須恵器	蓋	W-N 区	石室内床面の土の中	361	完形	外面青灰色　重ね焼き痕 内面ハケ調整
23	3	MI2	土師器	小甕	E-N 区	石室内床面の土の中	366	口縁部～胴部一部欠損	黄褐色　内・外面ハケ調整
23	4	MI2	山茶碗	碗	E-S 区	SK3（Ⅲ－１）	340	口縁部一部欠損	灰白色　墨書「万」か「ろ」か

＊1 管見の限り、周辺で知られる窯跡には類例を求めることができない。或いは、土師器の工人の関与が推測されるが、現時点では未知の窯の製品と言わざるを得ず、諸賢の垂教を請いたい。
＊2 Ⅴ今後の課題　３長良川流域の横穴式石室　－池尻大塚古墳の特徴と位置づけ－　p.70
＊3 Ⅳ自然科学分析　１土器内面付着土の土壌選別・珪藻分析・元素マッピング分析　p.55

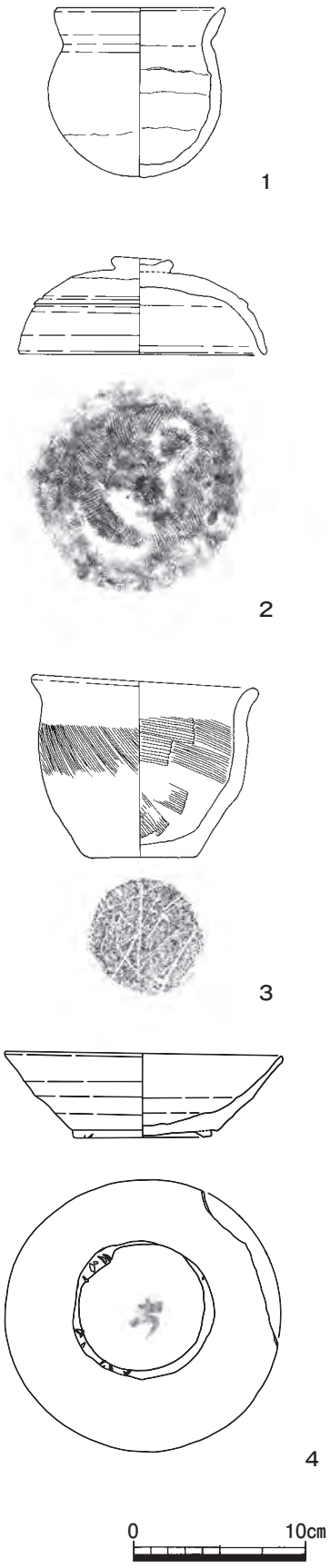


図23　出土遺物１（S=1/4）

写真47

鉄地金銅張飾金具　床面の直上から鉄地金銅張飾金具が５点（１,３～６）出土した。位置は、玄室北西側に集中している（図18）。

写真48　飾金具（１）出土状況

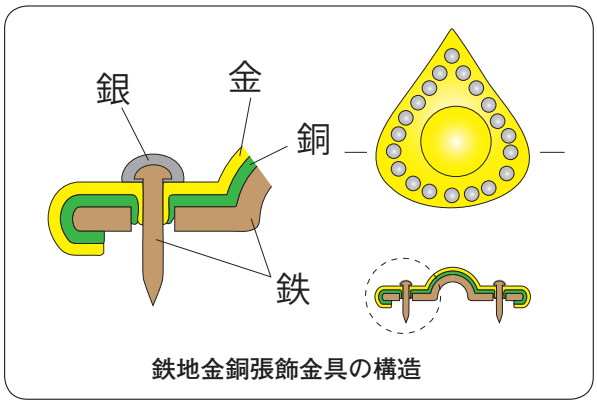
写真49　飾金具（４）出土状況

写真50　飾金具（６）,（３）出土状況

写真51　飾金具（５）と奥に土師器（１）出土状況

これらとは別に調査の中盤で、玄室南東側の流入土Ⅲ－2を穿つ浅い土坑（SK６）から飾金具（２）が出土していた。関連するその他の部分が床面から出土することが期待されたが、一方で床面から約１m高い位置であり、また山茶碗（４）が出土した土坑（SK３）がⅢ－1を穿っていたことから、13世紀前半までに乱掘を受けていることも推測された。

構造　厚さ１㎜ほどの鉄の地金に金銅板を裏側へ１～３㎜折り込んで張り、２列で対象物に鋲留した飾金具である。鋲頭には銀板が被せられている。



鉄地金銅張飾金具の構造

形状　形状は滴形の（１～３）と、帯状の（４,５）、さらに前者と後者が合体した形（６）がある。

状態　錆が表面に浮き出し、裏側に回り込ませた金銅板は例外なく外側へ押し出されている。表面も鋲の間から浮き出た錆に覆われ、保存処理を行うまでは銀の存在に気付かなかった。

滴形の飾金具の中央に打ち出された乳の頂部は、金銅板が鉄地から剥離して破裂した状態（１,３）

か、比較的良好な（2）においても鉄地が露わになっている。

帯状の飾金具は、いずれも折れた状態で出土したが、接合箇所で屈曲する場合（5,6）がある。折損の原因が加圧によるものであることを物語る。

折損断面では、鉄地と金銅板の接着の様子が観察できるため、敢えて接合していない。また、折損する場合、鋲間を結んだ形で折れ易く、鋲が貫いた状態の断面を観察できることがある。（3）の断面を見ると、鋲が金銅板を鉄地の中ほどまで引き込んでいる様子がよく判る。鉄地に予め開けられた孔は、一旦金銅板で覆われるが、鉄地となじませることで孔の部分が凹んで見えたと思われ、そこを目当てに金銅板を鋲で貫きながら対象物に貼り付けたと見られる。

写真52　飾金具（3）鋲の断面

本体の推定　鋲は裏側でカシメられた様子はなく、先端まで残存するものは無いが、残りのよいもので鋲頭から長さ11㎜を測る。また、（6）の裏面に、木質と思しき繊維が認められたため樹種同定を行ったところ、広葉樹の道管の圧痕で、長辺に対して直角方向の柾目材であることが判った。[*1] したがって、本体は木製で、ある程度の厚みのある部分に鋲を釘のように打ち付けて固定したと考えられる。

まず馬具に類例を求めたが、帯状の金具が鐙（あぶみ）に施された例は知られるが、[*2] 滴形の金具は管見の限り見当たらない。また、馬具とするには、多様な馬具全体を構成するその他の部品が出土していないことも決め手に欠ける。帯状の金具は靱（ゆき）金具の可能性も考えられるが、直角に折れ曲がった部分[*3]の出土を見ていないうえ、滴形単体の例はない。胡籙（ころく）の飾金具とされる帯状の金具で、中間に楕円形の装飾を持つものがあり、[*4] その類例を尋ねたところ、滴形ではないが方形の基部に楕円形の頭が付く擬宝珠形の金具が単体で伴う例を見出すことができた。[*5] 断定はできないが、暫定「胡籙」として今後も類例を求めたい。

靱や胡籙であれば、鏃が伴えば決め手となり得る。或いは、副葬品ではない（棺などの）可能性も考慮しておかなければならないが、手掛かりが玄室床面に未だ保存[*6]されていることを期待したい。

表４　鉄地金銅張飾金具

図版		出土地点	遺構・層位	取上番号	長さ（㎜）	最大幅（㎜）	厚さ（㎜）	乳高さ（㎜）	重さ（g）	鋲数
24	1	W-N 区	床面直上	353	48	41	2.5	（10.0）	14.2	20
24	2	E-S 区	SK6	341	48	39	2.5	10.0	11.7	22（内 1 欠）
24	3	W-N 区	床面直上	354	48	41	1.5	11.0	15.0	16（内 1 欠）
25	4	W-N 区	床面直上排土	355	（59）	22	1.3		9.6	18
25	5	W-N 区	床面直上より数cm上	356，357	（121.5）	21	1.3		19.3	34（内 1 欠）
26	6	W-N 区	床面直上	362	（90）	40	3.0	（10.0）	25.4	29（内 1 欠）

＊1 Ⅴ自然科学分析　3 鉄地金銅張飾金具に付着した木質の樹種同定と赤外分光分析　p.62
　また、本体が漆塗りの製品であったことも想定して赤外分光分析を行ったが、芳しい成果は得られなかった。
＊2 藤岡市教育委員会 1993『平井地区 1 号古墳』同古墳から出土した木芯鉄板張壺鐙の飾金具（Ⅱ類）。
＊3 奈良県立橿原考古学研究所編 1990『斑鳩藤ノ木古墳第 1 次調査報告書』斑鳩町教育委員会 同古墳出土の靱金具に代表される方形筒型靱の底板責金具。
＊4 八賀 晋編 1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館 西宮山古墳から出土した胡籙金具。
＊5 和歌山県教育委員会 1959『大谷古墳』
＊6 玄室内に残したセクションベルトが床面の凡そ70％を覆い隠している。

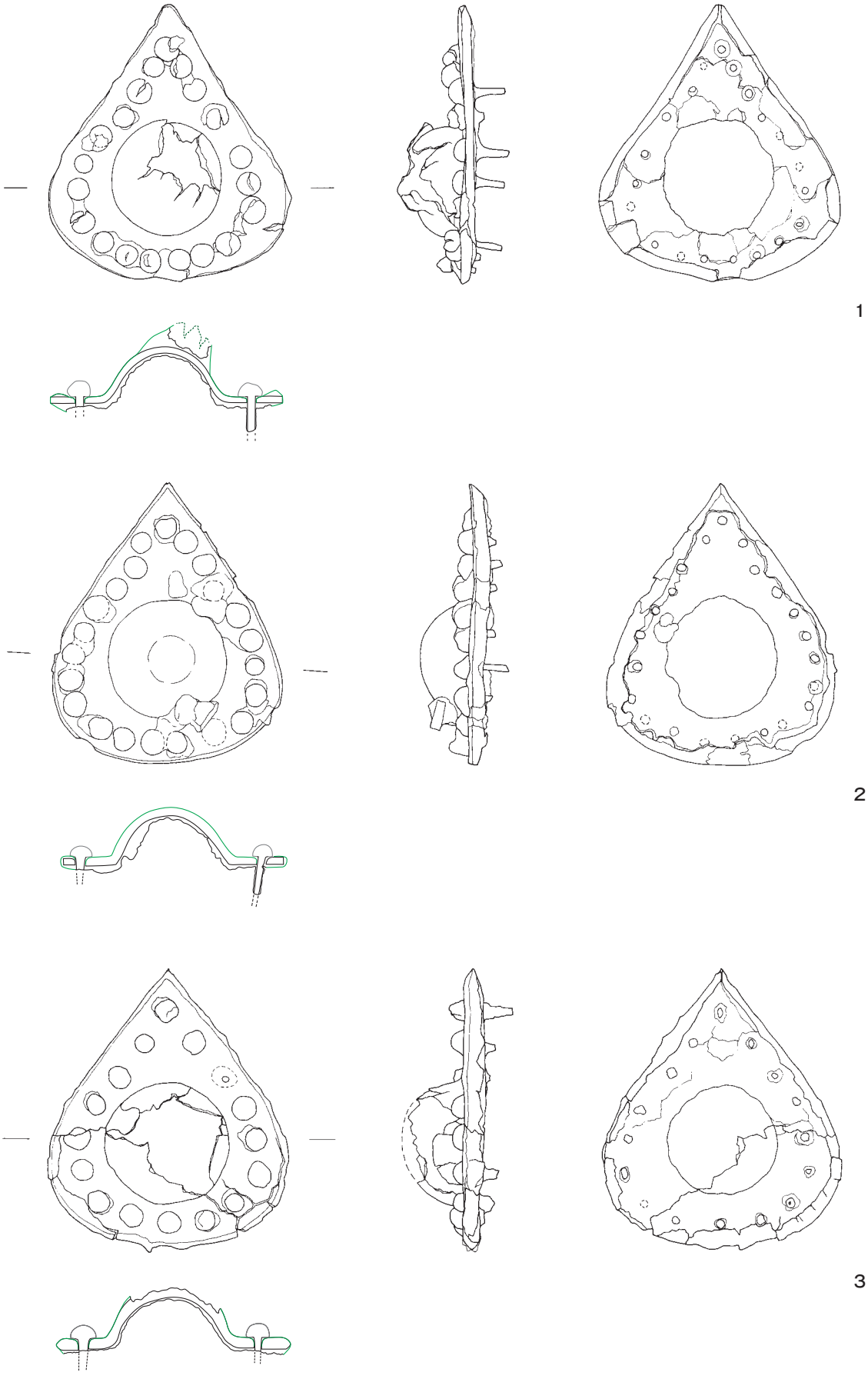


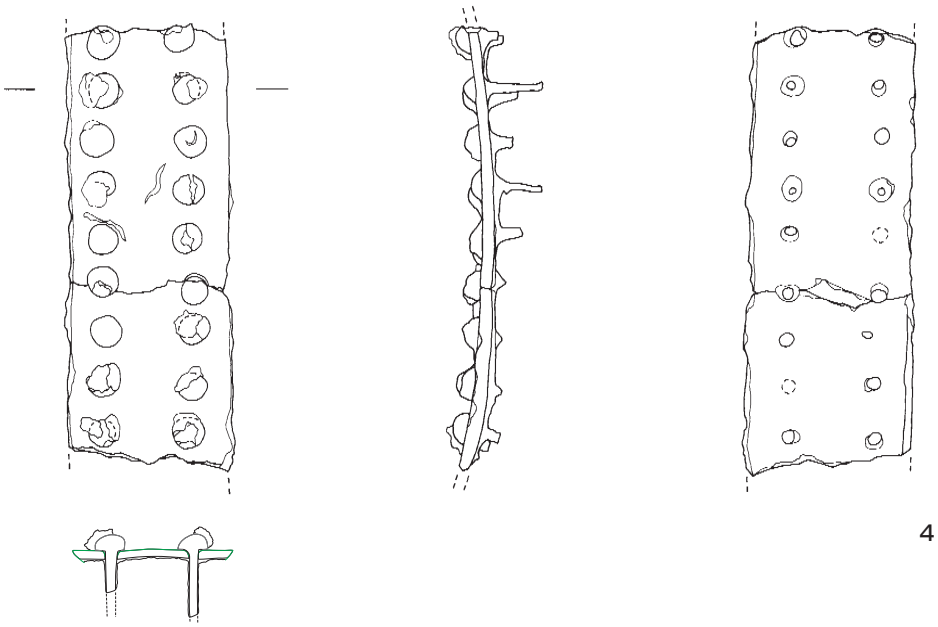
図24　出土遺物２　鉄地金銅張飾金具（S=1/1）

1

2

3

写真53



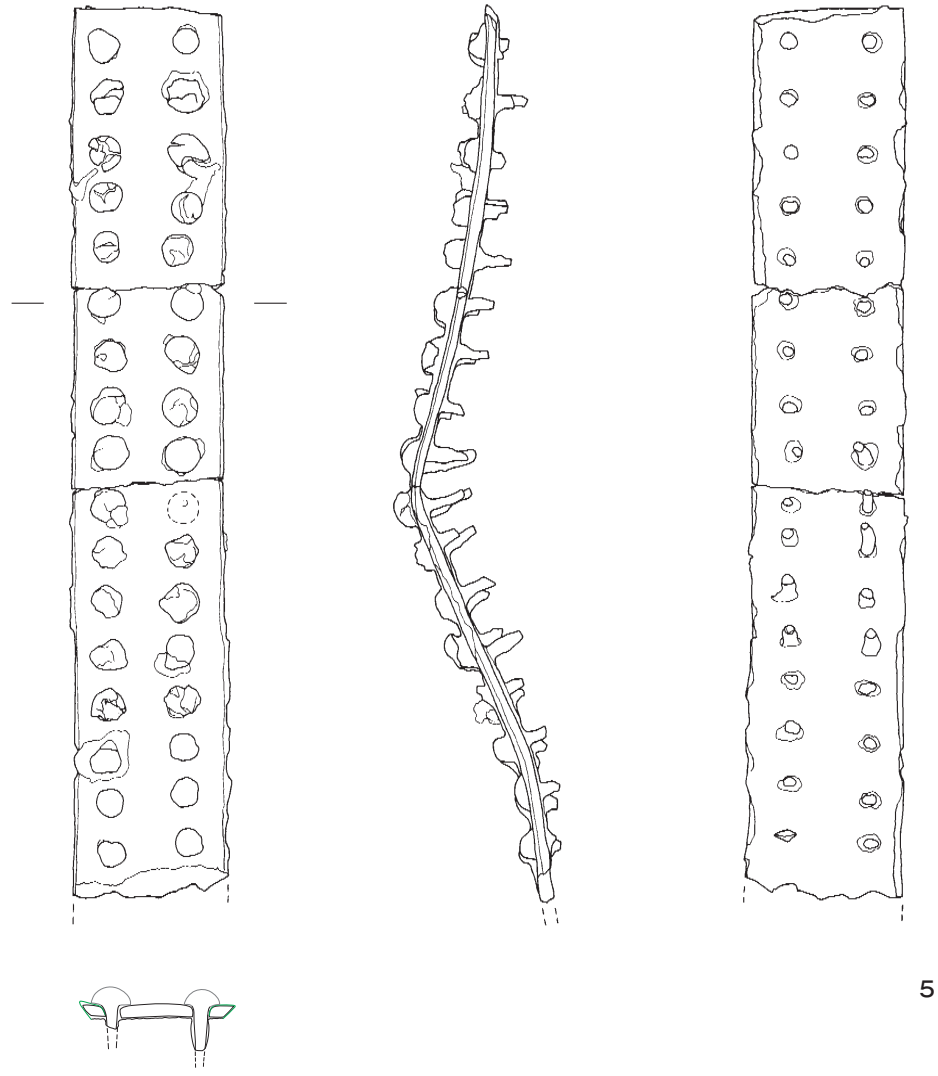


図25　出土遺物３　鉄地金銅張飾金具（S=1/1）

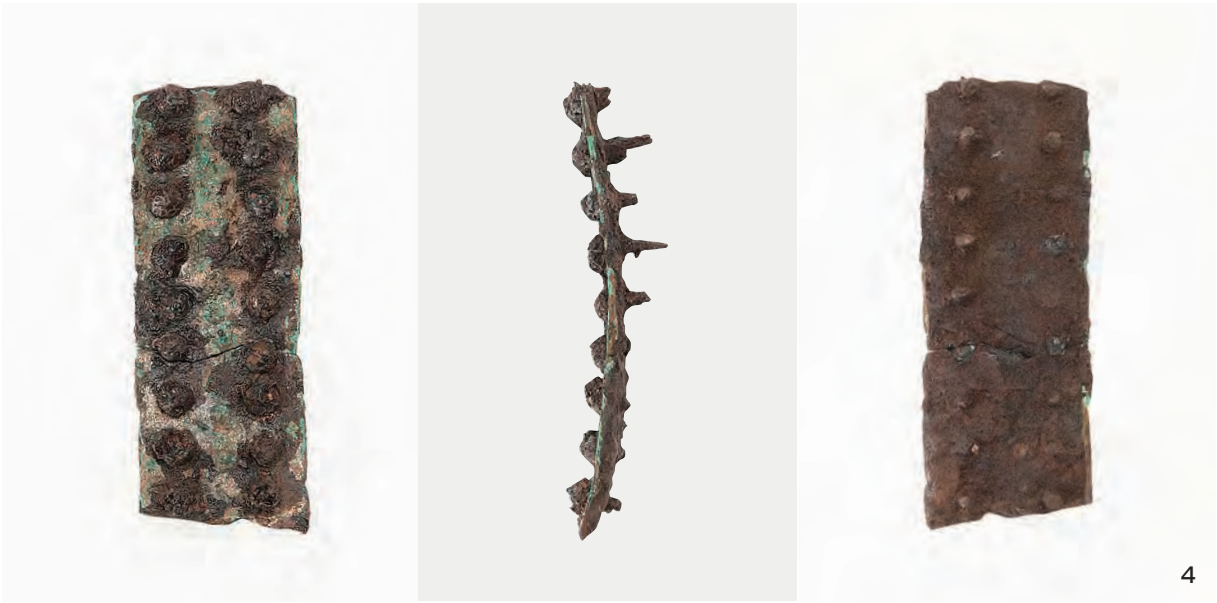


写真54

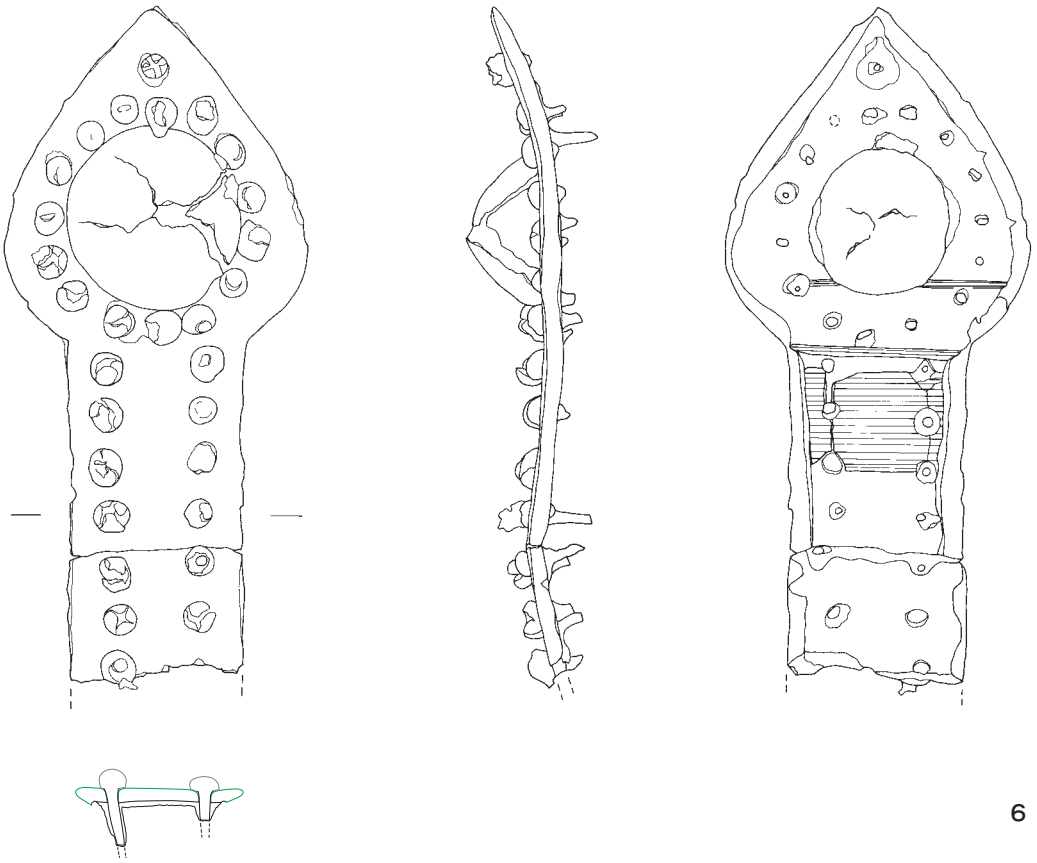


図26　出土遺物４　鉄地金銅張飾金具（S=1/1）

写真55

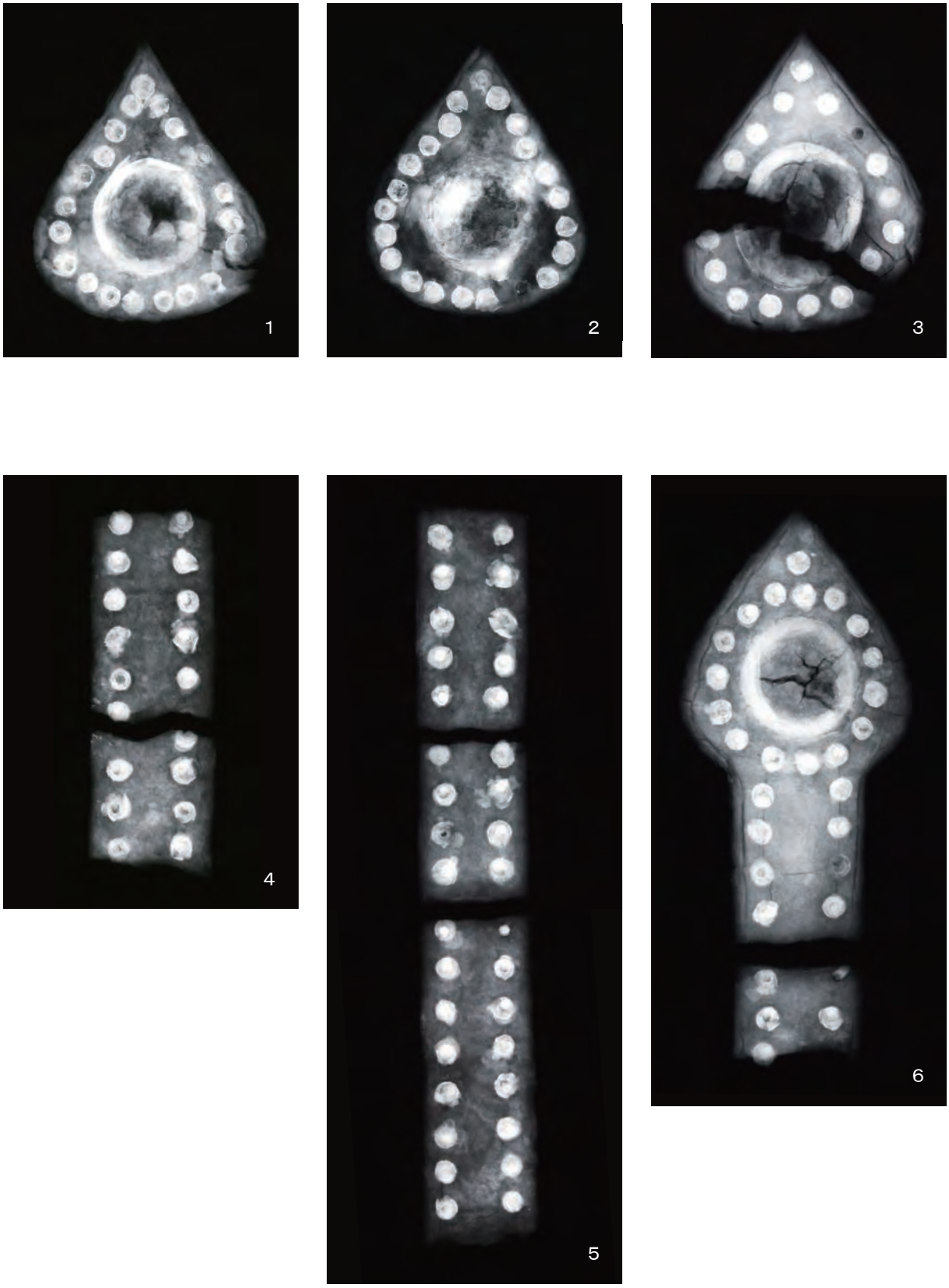


写真56　鉄地金銅張飾金具　X線写真

Ⅳ 自然科学分析

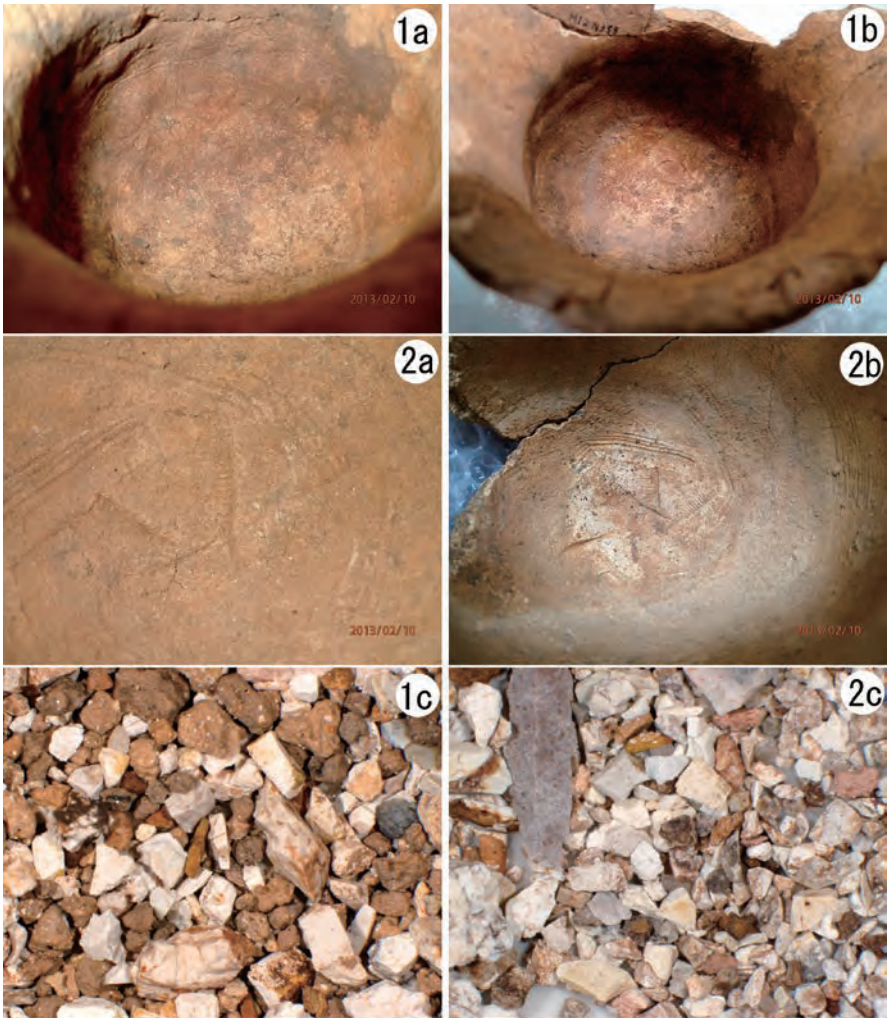
1 土器内面付着土の土壌選別・珪藻分析・元素マッピング分析

試料と方法 分析試料は、小壺（１）（分析No.1，遺物No.360）と小甕（３）（分析No.2，遺物No.366）である（表５）。

表５ 分析試料とその特徴

試料No.	調査区	遺物	遺物No.	出土位置	土の特徴	分析	処理重量（g）
1	W-N区	小壺	360	床直上	黄褐色（2.5Y5/4）砂礫混じり粘土質シルト、現生植物、炭化物、黒色土壌粒子	蛍光X線分析 微細物・珪藻分析	26.5
2	E-N区	小甕	366	床面の土の中	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土～シルト質砂礫、現生植物、炭化物、黒色土壌粒子	蛍光X線分析 微細物・珪藻分析	214.0

土壌選別では、土器内土壌の一部を採取し、水を加えて浮遊物（炭化物や現生根など）を回収した。その後、超音波洗浄して、１φ（0.5mm）、２φ（0.25mm）、３φ（0.125mm）、４φ（0.063mm）の４枚の篩を重ねて湿式篩分けを行った。これらは、実体顕微鏡を用いて特徴を記載した。



試料No. 1

1a 内面付着土

1b 同洗浄後

試料No. 2

2a 内面付着土

2b 同洗浄後

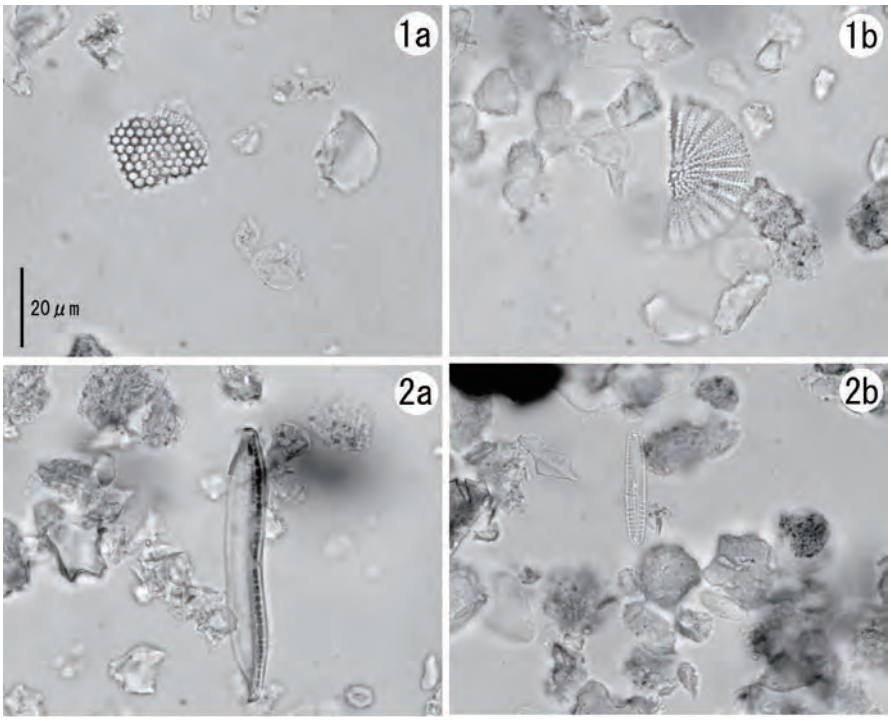
篩残渣

1c 試料No. 1の１φ（0.5mm）

2c 試料No. 2の１φ（0.5mm）

写真57 土器内面付着土と１φ（0.5mm）篩残渣

土器の内面付着土の珪藻分析は、刷毛およびブラシを用いて、洗浄して回収した。回収した試料は、珪藻分析観察用のプレパラートを作製した。プレパラートは、300～1000倍で観察・同定した。



試料No. 1

1a 海水種

Coscinodiscus sp.

1b 湖沼浮遊生指標種群

Stephanodiscus carconensis

試料No. 2

2a 陸域指標種群

Hantzschia amphioxys

2b 陸域指標種群

Pinnularia subcapitata

写真58　付着土中の珪藻化石の顕微鏡写真

土器内土壌の元素マッピング分析は、土壌を10ｇ程度採取して乾燥させた後、塩化ビニール製リングに充填した後(セルロース敷き)、油圧プレス機を用いて20ｔプレスをして測定用ブリケットを作成した。はじめに、ブリケットで元素マッピング分析を行った後、リン(Ｐ)マッピング画像の濃度の高い位置を５箇所選定して点分析を行った。また、水銀(Hg)が検出されたことから、水銀の高い位置について点分析を行った。

測定は、Ｘ線分析顕微鏡(㈱堀場製作所製XGT－5000TypeⅡ)を用いた。元素マッピングの測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10,000secである。点分析の測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP(ファンダメンタルパラメータ)法で半定量分析を行った。

分析No. 1　土壌分析により回収された浮遊物では、炭化草本植物の茎部や虫えいが検出され、現生の根も多く含まれていた。炭化種実は検出されなかった。

篩分け残渣では、風化した白色チャートが多く、泥質岩、石英が含まれていた。

内面付着土の珪藻分析では、海水種*Coscinodiscus*属、湖沼浮遊生指標種群の*Stephanodiscus*属など

表６　堆積物中の珪藻化石

分類群		種群	1	2
Coscinodiscus	spp.	?	1	
Achnanthes	spp.	?	1	
Epithemia	*turgida*	W		1
Eunotia	spp.	?		3
Hantzschia	*amphioxys*	Q	8	3
Navicula	*mutica*	Q		1
N.	spp.	?	1	
Neidium	*bisulcatum*	Q		1
Pinnularia	*borealis*	Q	1	
P.	*subcapitata*	Q		1
Stephanodiscus	*astraea*	W	7	
S.	*carconensis*	M	4	
Synedra	*ulna*	W	1	1
Fresh-Unknown		?		1
海水不定・不明種		?	1	
湖沼浮遊生指標種群		M	4	
陸域指標種群		Q	9	6
広布種		W	8	2
淡水不定・不明種		?	2	4
合　計			24	12

が検出された（表６）。海水に関わる痕跡が見られたが、藻塩法による製塩に関わる珪藻化石[*1]は検出されておらず、塩が入っていた痕跡は認められない。ただし、今回の珪藻分析では、胎土の粘土材料に使用された粘土中の珪藻化石が検出された可能性も否定できない。

元素マッピング分析（表７）では、リン（P）の輝度の高い部分が複数検出され（写真59-1c）、点分析№４においてリン（P_2O_5）が10.04％、カルシウム（CaO）が32.61%検出された。人あるいは動物の区別はできないものの、土器内に骨質物が含まれていた可能性が高い。また、イオウ（S）と水銀（Hg）が共に高い部分も検出され（写真59-1d, 1f）、点分析において水銀（HgO）が最大13.10%検出された。土器内に水銀朱（HgS：硫化水銀）そのものが入っていた可能性や、水銀朱で赤彩されたものが入っていた可能性、石室内が水銀朱で赤彩されていた可能性などが考えられる。ただし、土器内面は赤化していなかったため、土器内に入っていた可能性は低い。

分析No.２　土壌分析により回収された浮遊物では、炭化材小片が多く、同様に炭化草本植物の茎部や虫えいが検出され、現生の根も含まれていた。炭化種実は検出されなかった。

篩分け残渣では、風化した白色チャートが多く、泥質岩、石英が含まれていた。

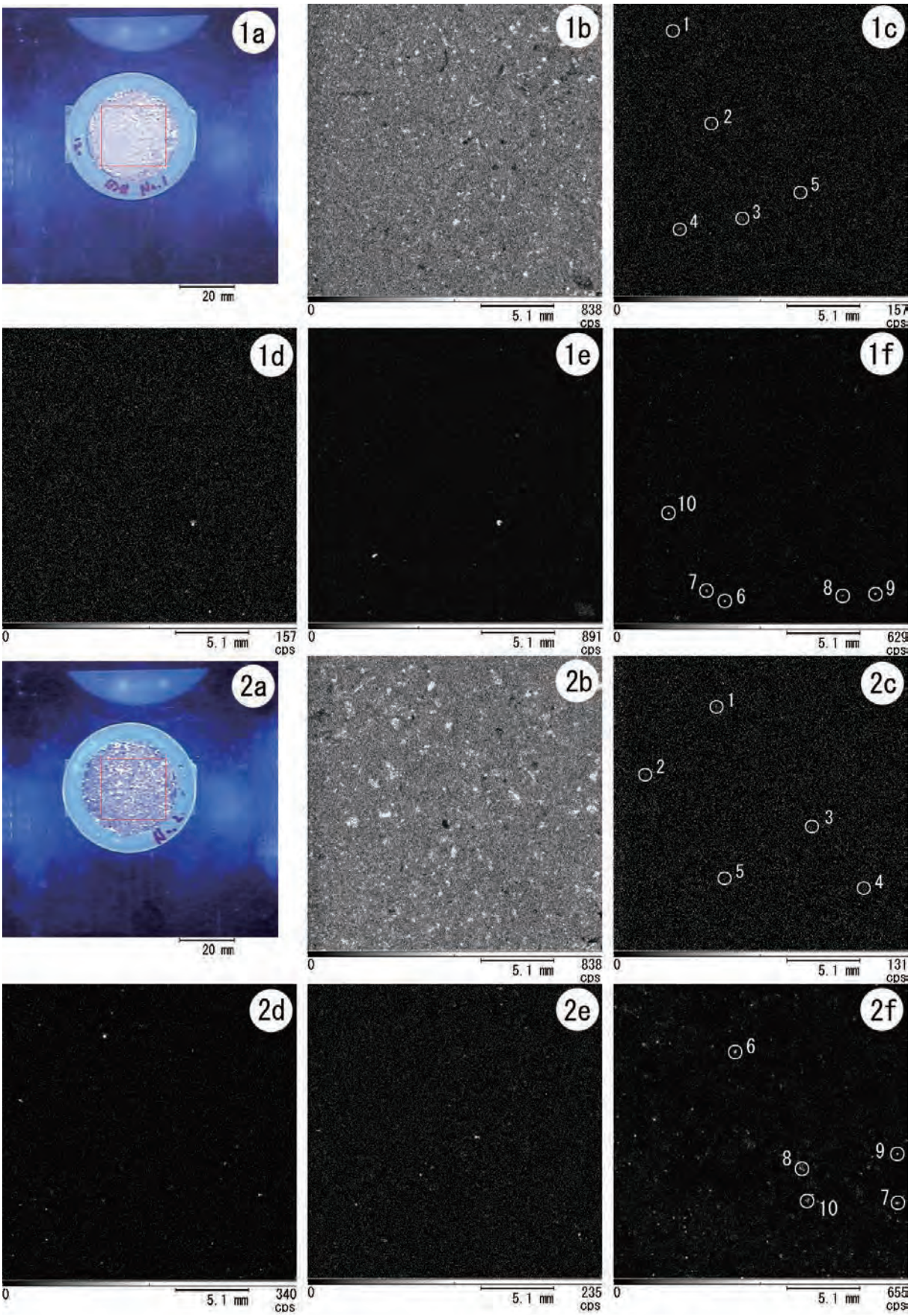
内面付着土の珪藻分析では、*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻が検出された（表６）。

元素マッピング分析（表７）では、リン（P_2O_5）とカルシウム（CaO）が共に高い場所は検出され（写真

表７　土器内土壌の元素マッピング分析による点分析結果（単位：%）

分析 No.	対象	点 No.	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	HgO	total
1.00	P・Ca	1	2.07	16.35	72.73	0.63	0.26	2.07	0.08	0.61	0.03	5.13	0.00	0.01	0.01	0.01	0.00	0.02	0.01	100.02
		2	3.30	21.05	63.13	0.43	0.13	1.70	0.12	1.06	0.07	8.90	0.01	0.02	0.02	0.01	0.00	0.04	0.02	100.01
		3	1.71	19.99	62.04	3.28	0.18	1.80	0.11	1.12	0.08	9.60	0.00	0.02	0.02	0.00	0.00	0.03	0.01	99.99
		4	1.44	13.48	30.98	10.04	0.68	1.14	32.61	0.81	0.06	8.60	0.00	0.02	0.03	0.03	0.00	0.06	0.03	100.01
		5	2.95	14.53	48.34	0.00	8.42	0.88	16.27	1.17	0.05	7.25	0.00	0.02	0.03	0.01	0.00	0.04	0.04	100.00
	Hg	6	3.05	20.17	49.98	0.43	1.93	1.80	0.04	0.98	0.06	8.32	0.01	0.00	0.04	0.01	0.01	0.06	13.10	99.99
		7	2.15	20.33	62.59	0.34	0.24	1.61	0.16	0.93	0.05	7.72	0.00	0.01	0.03	0.03	0.00	0.04	3.78	100.01
		8	1.52	21.32	55.79	0.27	4.76	1.99	0.07	0.90	0.06	8.58	0.00	0.02	0.03	0.00	0.00	0.06	4.59	99.96
		9	3.15	21.67	57.59	0.34	2.17	1.82	0.04	1.04	0.06	8.74	0.00	0.01	0.03	0.01	0.00	0.05	3.29	100.01
		10	1.34	19.45	60.90	0.26	0.31	1.90	0.06	1.19	0.06	8.95	0.01	0.02	0.03	0.02	0.00	0.06	5.43	99.99
2.00	P・Ca	1	2.29	16.33	48.29	0.00	13.15	1.41	0.07	0.88	0.09	8.36	0.01	0.01	0.05	0.01	0.00	0.05	9.02	100.02
		2	2.04	15.71	74.32	0.21	0.26	1.33	0.05	0.71	0.05	5.23	0.00	0.02	0.01	0.01	0.00	0.04	0.01	100.00
		3	3.06	23.50	59.24	0.30	0.30	1.84	0.11	1.16	0.10	10.28	0.00	0.02	0.02	0.01	0.00	0.04	0.04	100.02
		4	2.38	21.10	64.05	0.48	0.38	1.84	0.09	1.04	0.07	8.39	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.03	0.11	100.00
		5	0.91	20.10	65.77	0.14	0.43	2.33	0.09	1.11	0.07	7.59	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.03	1.39	100.00
	Hg	6	3.08	15.79	44.68	0.36	15.80	1.22	0.06	0.84	0.08	8.53	0.01	0.03	0.04	0.02	0.00	0.05	9.42	100.01
		7	2.56	17.08	52.95	0.37	7.86	1.68	0.06	1.05	0.05	7.26	0.01	0.00	0.05	0.00	0.01	0.06	8.96	100.01
		8	0.98	20.91	60.64	0.13	0.50	3.06	0.08	1.07	0.06	8.79	0.00	0.02	0.03	0.03	0.00	0.05	3.64	99.99
		9	1.71	20.07	59.20	0.20	0.26	1.90	0.06	1.37	0.07	9.16	0.01	0.01	0.04	0.04	0.00	0.03	5.89	100.02
		10	2.48	21.78	61.39	0.24	0.72	1.91	0.10	1.20	0.11	7.29	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.03	2.70	99.99

＊1 森 勇一 1991「珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察」『考古学雑誌76』P.62～75
藤根 久・服部哲也 2000「密閉して出土した須恵器蓋杯内の内容物－塩利用の可能性－」『日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集』



1a 分析№１の測定試料　1b ケイ素(Si)　1c リン(P)　1d イオウ(S)　1e カルシウム(Ca)　1f 水銀(Hg)
2a 分析№２の測定試料　2b ケイ素(Si)　2c リン(P)　2d イオウ(S)　2e カルシウム(Ca)　2f 水銀(Hg)

写真59　元素マッピング図と点分析位置（数字は分析№，○：点分析位置）

59-2d, 2f)、点分析において水銀(HgO)が最大9.42%検出された。土器内に水銀朱(HgS：硫化水銀)そのものが入っていた可能性や、水銀朱で赤彩されたものが入っていた可能性、石室内が水銀朱で赤彩されていた可能性などが考えられる。ただし、土器内面は赤化していなかったため、土器内に入っていた可能性は低い。

分析結果

試料No.１　骨質物の痕跡が検出された。また、土器内に水銀朱(HgS：硫化水銀)そのものが入っていた可能性や、水銀朱で赤彩されたものが入っていた可能性、石室内が水銀朱で赤彩されていた可能性などが考えられた。土器内面付着土の珪藻分析では、海水種*Coscinodiscus*属などが検出され、海水に関わる痕跡が見られた。

試料No.２　骨質物の証拠は検出されなかった。ただし、試料No.１と同様、土器内に水銀朱(HgS：硫化水銀)そのものが入っていた可能性や、水銀朱で赤彩されたものが入っていた可能性、石室内が水銀朱で赤彩されていた可能性などが考えられた。

なお、いずれの土器もその内面は赤化していなかったため、土器内に入っていた可能性は低い。

表８　分析結果のまとめ

試料No.	遺物	遺物No.	水洗選別		珪藻分析	蛍光X線分析	
			炭化物	鉱物粒子(0.5mm以上)		P･Ca分析	水銀
1	小壺	360	炭化草本植物破片、虫えい、(現生根多く含む)	風化した白色チャート主体、泥質岩、石英	海水種*Coscinodiscus*属、湖沼浮遊生指標種群の*Stephanodiscus*属などが検出	骨質	最大13.10%検出
2	小甕	366	炭化材小片多い、炭化草本植物破片、虫えい、(現生根含む)	風化した白色チャート主体、泥質岩、石英	*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻(湿った陸域環境)が検出	無	最大9.42%検出

(藤根　久)

2　鉄地金銅張飾金具の蛍光X線マッピング分析

試料と方法　分析対象は、石室床面より出土した鉄地金銅張飾金具（1）（遺物No.353）である。表面は、一部破れや錆に覆われるものの金色を呈し、また鋲頭の部分は銀白色であった。全面に鉄錆あるいは緑青錆の析出、錆に覆われた金色の薄板の折り返しが裏面端部に観察された。レントゲン写真でも製品周囲に重元素の物質を折り返した様子が確認され、また鋲頭の部分にも製品周囲と同様に折り込まれた様子の白い影が確認された。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である㈱堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また本装置では、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

分析は、最初に元素マッピング分析を行った。さらに、主要元素のマッピング図を基に輝度の高い箇所を選びポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間10000sを4回走査、ポイント分析が50kV、0.10～0.46mA（自動設定）、ビーム径100μm、測定時間3000sに設定し、いずれも非破壊で行った。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（以下FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。定量値の解釈については大まかな参考値程度にとどめておくべきである。

結果　図27に5ヶ所（a～e）の分析ポイントを示した元素マッピング図、ポイント分析により得られたスペクトル、表9にポイント分析により得られたFP法による半定量分析結果を示す。ケイ素、アルミニウムなど土砂に多く含まれる元素を除くと、銅（Cu）、ヒ素（As）、金（Au）、水銀（Hg）、銀（Ag）、鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、アンチモン（Sb）が検出された。

表9　半定量分析結果（mass%）

分析箇所	Cu	As	Au	Hg	Ag	Fe	Ni	Sb
a	99.51	0.33	—	—	—	0.16	—	—
b	70.02	8.28	12.49	1.10	0.30	7.07	0.57	0.16
c	36.30	0.19	53.71	7.74	0.75	0.72	0.33	0.27
d	1.71	—	0.30	—	89.71	7.83	—	0.45
e	1.40	—	—	—	—	98.60	—	—

これにより、金銅板に覆われた鉄地で、鋲頭表面は銀であることが判明した。金に伴って水銀も検出されており、金アマルガムによるめっき（鍍金）であることも確認できる。鋲頭からは水銀は検出されておらず、鉄製鋲の鋲頭に銀薄板を被せてあると考えられる。

また、表面のほぼ全面から銅が検出される一方、スズ（Sn）や鉛（Pb）は検出されておらず、両者は存在していても微量でほとんど含まれていないと考えられる。すなわち、鍍金された薄板は、青銅板でなく銅板であることを示している。また、部分的にではあるが銅に伴ってヒ素も高く検出される箇所がみられた。ほかにニッケル、銀、アンチモンも銅に伴って検出されており、ヒ素やこれら元素は銅中の不純物であると推定される。　（竹原弘展）

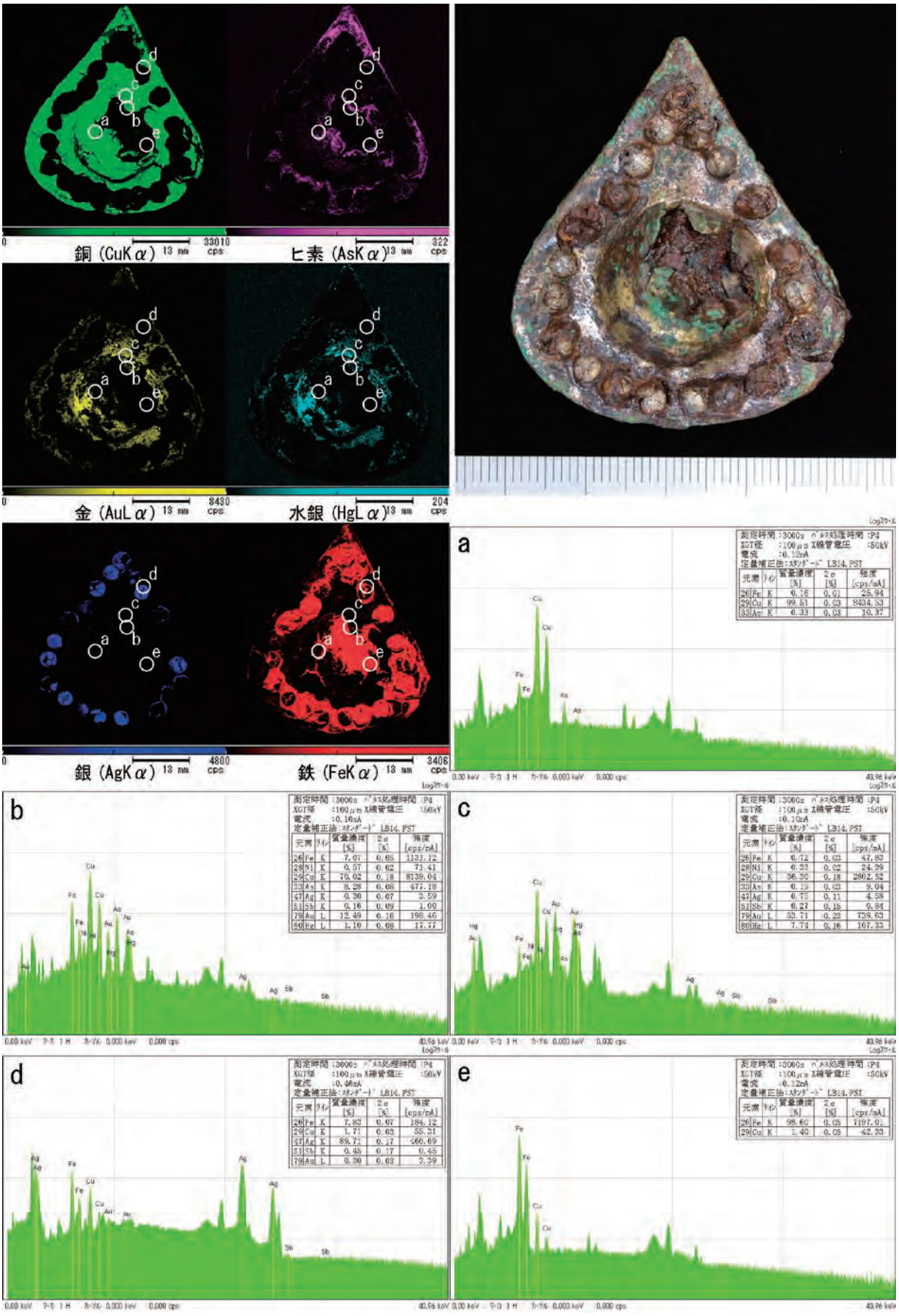


図27　鉄地金銅張飾金具の元素マッピング分析結果

3　鉄地金銅張飾金具に付着した木質の樹種同定と赤外分光分析

池尻大塚古墳より出土した鉄地金銅張飾金具について、その裏側に付着した木質と思しき繊維の正体と飾金具が張り付けられていた本体に漆が施されていた可能性を探るために、マイクロスコープ観察及び赤外分光分析を行った。

試料と方法　試料は、石室床面より出土した飾金具（６）（遺物№362）である（写真60-1a, 1b）。この飾金具は、鉄地金銅張製品であり、馬具の一部或いは胡籙の飾金具である可能性が考えられている。

検討した場所は、取り付け面の木質付着部である。観察は、実体顕微鏡および㈱キーエンス製デジタルマイクロスコープVHX-1000を用いた。分析は、漆の有無を確認するために、赤外分光分析を行った。また、鋲の一部が折れて新鮮面が露出したため、化学組成を調べるために蛍光Ｘ線分析を行った。

赤外分光分析は、木質圧痕部において滑らかな部分（写真60-1b-2）から手術用メスを用いて削り取った後、押しつぶして、厚さ１㎜程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形した。また、クロロホルム溶融試験後の沈殿物の茶褐色粒子を採取し、同様に厚さ１mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７ｔで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

蛍光Ｘ線分析は、（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡ（エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置）を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大電圧50kV、最大電流1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、Ｘ線ビーム径が100μm、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。点分析は、電圧50kV、電流0.10～0.46mA（自動設定）、ビーム径100μm、測定時間500秒で測定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（以下FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

結果および考察　裏面には、木質様付着部が数ケ所において、木質付着部（写真60-1b-1）と木質圧痕部（写真60-1b-2）の２タイプが見られた。

木質付着部及び木質圧痕部では、広葉樹の道管（最大100μm）と考えられる組織が見られ、木質圧痕部では間隔をあけて数列にわたって分布する環孔材の柾目組織が観察された（写真60-3）。同様の道管は、木質付着部においても観察された（写真60-2）。柾目材の伸長方向は金具の軸方向（上下方向）と直交している。

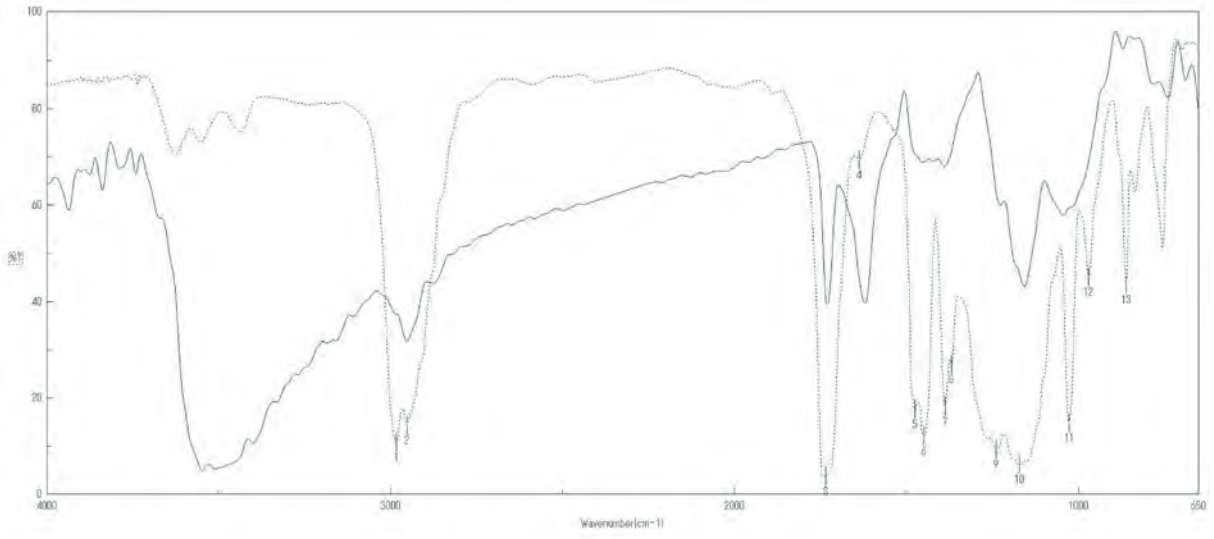
写真60-4～6の道管部の写真（３Ｄ画像）は、道管部が凸面であり、圧痕として残存していることが判る。圧痕として残った原因は、①木質の表面が漆塗りされており、道管に漆が充填されたか、逆に②飾金具の鉄分が道管に入り込んだかの２通りの可能性が考えられる。

表10　パラロイドB-72の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	パラロイド B-72	
	位置	強度
1	2983.34	10.7754
2	2952.48	14.3709
3	1733.69	3.7999
4	1637.27	69.3650
5	1475.28	17.6624
6	1448.28	12.1307
7	1386.57	18.2311
8	1369.21	27.0162
9	1238.08	9.4102
10	1170.58	6.2064
11	1025.94	14.8967
12	970.02	45.0481
13	860.10	43.4310

赤外分光分析は、木質圧痕部の滑らかな部分（写真60-1b-2）から手術メスを用いて削り取った。採取した粉末は、淡褐色を呈し、採取部の下位には金属部が露出した。測定した結果、パラロイドB-72に見られる吸収スペクトルが確認された（図28、表10）。これは、分析前に既に施されていた保存処理で使用されたパラロイドB-72の成分である。

木質の表面の漆の有無は確認できなかった。



実線：木質部　点線：パラロイドB-72　数字：パラロイドB-72の赤外吸収位置

図28　木質部（写真60-1b-3）の赤外吸収ベクトル

表11　鋲鉄部（写真60-1b-4）の半定量分析結果

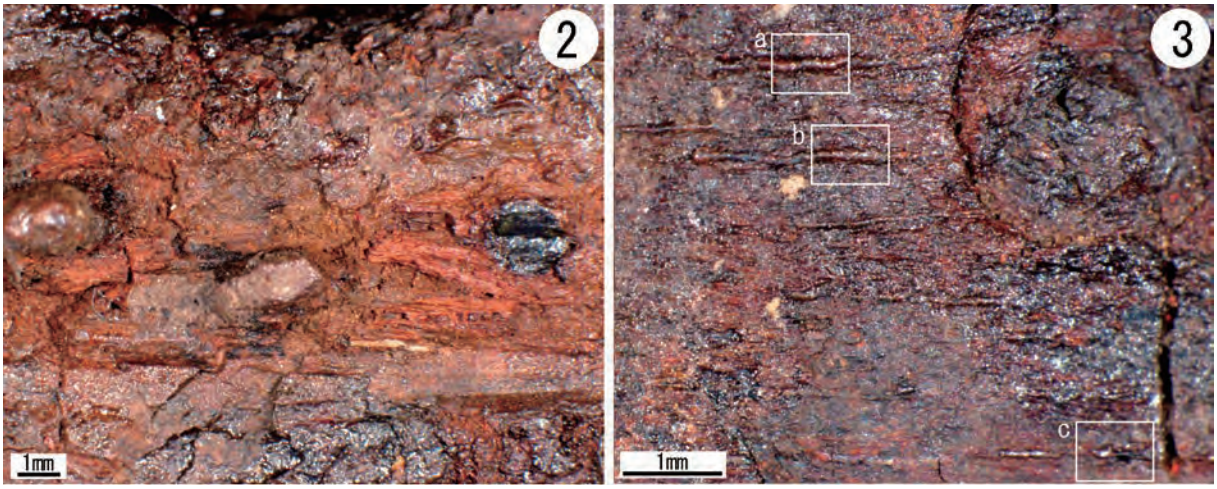
点 No.	Fe	Cu	As	Total
a	99.30	0.18	0.52	100.00
b	99.43	0.18	0.39	100.00
c	99.80	0.09	0.11	100.00

鋲の破断部（写真60-1b-4）のＸ線分析では、鉄（Fe）が99.30～99.80％、銅（Cu）が0.09～0.18％、ヒ素（As）が0.11～0.52％であった（表11）。

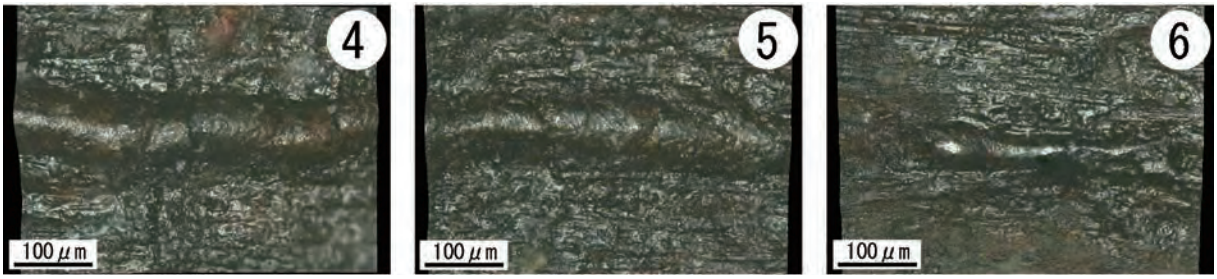
池尻大塚古墳より出土した鉄地金銅張飾金具について、マイクロスコープ観察を行ったが、木質付着部と圧痕部が確認され、広葉樹の柾目材であることが判明した。また、漆塗りの可能性を調べるために行った赤外分光分析では、マイクロスコープ観察のとおり木質部の表面形態は保存されているものの、ウルシオールを検出することはできなかった。これは鉄と置換されているためであり、必ずしも漆塗りは無かったという結論を導くものではない。　（藤根　久）

1a　鉄地金銅張飾金具の表面

1b　鉄地金銅張飾金具の裏面(取り付け面)
3は、赤外分光分析を行った試料の採取位置
4は、蛍光X線分析を行った位置



②木質付着部1　　③木質付着部2



④道管a部　　⑤道管b部　　⑥道管c部

写真60　鉄地金銅張飾金具と木質部のマイクロスコープ写真

Ⅴ　今後の課題

1　石室の基準尺度

石室構築基準尺の抽出　石室の計測値(図29)から構築基準尺の抽出を試みた結果、各部位で「唐大尺」[*1](以下、「唐尺」という)に近似した値が得られた。

各部位の計測値を整数で除した一覧を作成(予め、高麗尺＝35.56cm〈緑色〉、唐尺＝29.63cm〈赤色〉に±３㎜の許容範囲を設け、その範囲に数値が収まれば、それぞれの欄が該当する色に点灯するようプログラム[*2])した。その結果、各部において唐尺が浮かび上がった(表12)。

内法のみが対象であることや施工の誤差、経年による歪み[*3]は考慮していない。また、計測値の加減を含む許容範囲の妥当性[*4]については、なお検討を要する。したがって、現段階においては「このように測れば」という注釈付きである。しかし、各部に漏れなく唐尺が点灯した事実は、基準尺として唐尺に相当する長さが用いられた蓋然性の高さを示している。

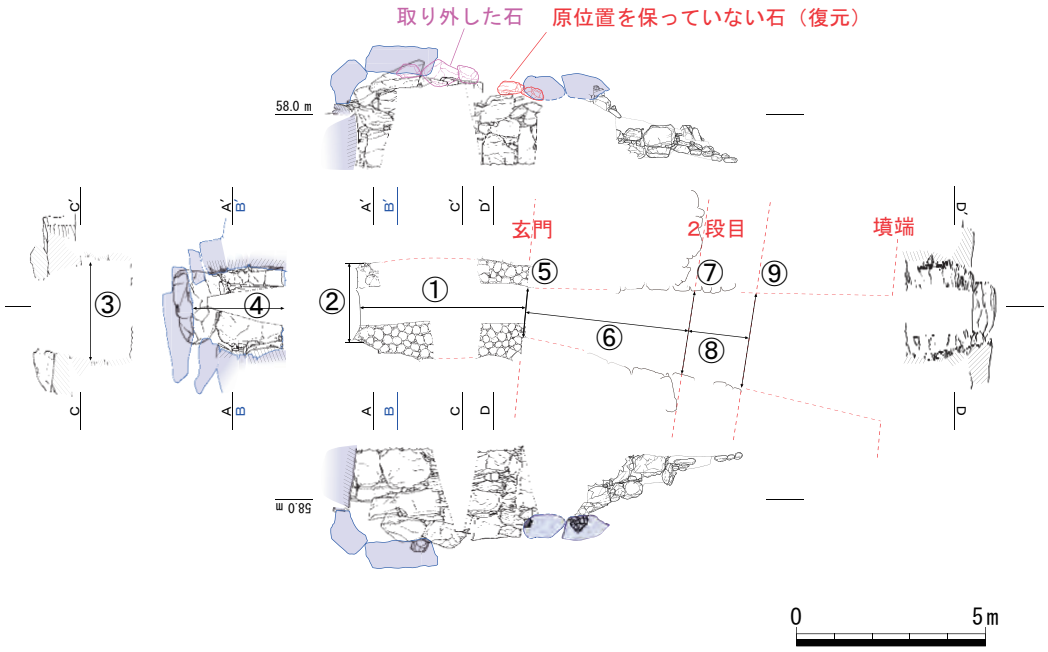


図29　計測部位（S=1/200）

＊1 大宝律令(701)で大尺・小尺が規定されたが、唐制に倣い高麗尺を大尺、唐大尺を小尺とした。和銅６年(713)には、大宝令の小尺を大尺とし、さらに短い小尺が設けられた。大尺は測地用、小尺は常用とされている。
＊2 Ｎ＋0.5で除した場合も考慮に入れた。
＊3 盛土と天井石の大部分が失われているため石室上部においてその度合いは著しい。
＊4 統計学上の「有意差」を無視した単純な割り算であり、設定した±３㎜の許容範囲は、石室について言えば計測値の±数cmの差を吸収していること以上の意味を持たない。

玄室　玄室長①は、4.32mを測るが、唐尺換算では概ね14.5尺となる。以下、表に現れた結果にしたがって見ていくと、奥壁の幅②は、（両隅の床面に埋め込まれた土器の外側で）2.07m（７尺）、玄室の幅③は、（断面図C－C’の最大値で）2.66m（９尺）、玄室の高さ④は、（唯一残る天井石で）2.50m（8.5尺）を測る。

羨道・前庭部　玄門の幅⑤は、1.33m（4.5尺）、玄門から墳丘２段目までの羨道の長さ⑥は玄室の長さ①とほぼ等しく、その幅⑦は、2.24m（7.5尺）を測り、そこからさらに前方へ石列が⑧1.62m延びるため、石室の全長①+⑥+⑧は、10.29m（35尺）、入り口の幅⑨は、2.52m（8.5尺）となる。

表12　共通尺の抽出

N	玄室長 ①	奥壁幅 ②	玄室最大幅 ③	玄室幅２	玄室玄門側幅	玄室高 ④	玄門幅 ⑤	①+羨道長 ⑥	２段目幅 ⑦	①+⑥+⑧ 石室長	入口幅 ⑨
1	432.00	207.00	266.00	224.00	235.00	250.00	133.00	867.00	224.00	1029.00	252.00
2	216.00	103.50	133.00	112.00	117.50	125.00	66.50	433.50	112.00	514.50	126.00
3	144.00	69.00	88.67	74.67	78.33	83.33	44.33	289.00	74.67	343.00	84.00
4	108.00	51.75	66.50	56.00	58.75	62.50	33.25	216.75	56.00	257.25	63.00
4.5	96.00	46.00	59.11	49.78	52.22	55.56	29.56	192.67	49.78	228.67	56.00
5	86.40	41.40	53.20	44.80	47.00	50.00	26.60	173.40	44.80	205.80	50.40
5.5	78.55	37.64	48.36	40.73	42.73	45.45	24.18	157.64	40.73	187.09	45.82
6	72.00	34.50	44.33	37.33	39.17	41.67	22.17	144.50	37.33	171.50	42.00
6.5	66.46	31.85	40.92	34.46	36.15	38.46	20.46	133.38	34.46	158.31	38.77
7	61.71	29.57	38.00	32.00	33.57	35.71	19.00	123.86	32.00	147.00	36.00
7.5	57.60	27.60	35.47	29.87	31.33	33.33	17.73	115.60	29.87	137.20	33.60
8	54.00	25.88	33.25	28.00	29.38	31.25	16.63	108.38	28.00	128.63	31.50
8.5	50.82	24.35	31.29	26.35	27.65	29.41	15.65	102.00	26.35	121.06	29.65
9	48.00	23.00	29.56	24.89	26.11	27.78	14.78	96.33	24.89	114.33	28.00
9.5	45.47	21.79	28.00	23.58	24.74	26.32	14.00	91.26	23.58	108.32	26.53
10	43.20	20.70	26.60	22.40	23.50	25.00	13.30	86.70	22.40	102.90	25.20
10.5	41.14	19.71	25.33	21.33	22.38	23.81	12.67	82.57	21.33	98.00	24.00
11	39.27	18.82	24.18	20.36	21.36	22.73	12.09	78.82	20.36	93.55	22.91
12	36.00	17.25	22.17	18.67	19.58	20.83	11.08	72.25	18.67	85.75	21.00
13	33.23	15.92	20.46	17.23	18.08	19.23	10.23	66.69	17.23	79.15	19.38
14	30.86	14.79	19.00	16.00	16.79	17.86	9.50	61.93	16.00	73.50	18.00
14.5	29.79	14.28	18.34	15.45	16.21	17.24	9.17	59.79	15.45	70.97	17.38
15	28.80	13.80	17.73	14.93	15.67	16.67	8.87	57.80	14.93	68.60	16.80
16	27.00	12.94	16.63	14.00	14.69	15.63	8.31	54.19	14.00	64.31	15.75
17	25.41	12.18	15.65	13.18	13.82	14.71	7.82	51.00	13.18	60.53	14.82
18	24.00	11.50	14.78	12.44	13.06	13.89	7.39	48.17	12.44	57.17	14.00
19	22.74	10.89	14.00	11.79	12.37	13.16	7.00	45.63	11.79	54.16	13.26
20	21.60	10.35	13.30	11.20	11.75	12.50	6.65	43.35	11.20	51.45	12.60
21	20.57	9.86	12.67	10.67	11.19	11.90	6.33	41.29	10.67	49.00	12.00
22	19.64	9.41	12.09	10.18	10.68	11.36	6.05	39.41	10.18	46.77	11.45
23	18.78	9.00	11.57	9.74	10.22	10.87	5.78	37.70	9.74	44.74	10.96
24	18.00	8.63	11.08	9.33	9.79	10.42	5.54	36.13	9.33	42.88	10.50
25	17.28	8.28	10.64	8.96	9.40	10.00	5.32	34.68	8.96	41.16	10.08
26	16.62	7.96	10.23	8.62	9.04	9.62	5.12	33.35	8.62	39.58	9.69
27	16.00	7.67	9.85	8.30	8.70	9.26	4.93	32.11	8.30	38.11	9.33
28	15.43	7.39	9.50	8.00	8.39	8.93	4.75	30.96	8.00	36.75	9.00
29	14.90	7.14	9.17	7.72	8.10	8.62	4.59	29.90	7.72	35.48	8.69
30	14.40	6.90	8.87	7.47	7.83	8.33	4.43	28.90	7.47	34.30	8.40
31	13.94	6.68	8.58	7.23	7.58	8.06	4.29	27.97	7.23	33.19	8.13
32	13.50	6.47	8.31	7.00	7.34	7.81	4.16	27.09	7.00	32.16	7.88
33	13.09	6.27	8.06	6.79	7.12	7.58	4.03	26.27	6.79	31.18	7.64
34	12.71	6.09	7.82	6.59	6.91	7.35	3.91	25.50	6.59	30.26	7.41
35	12.34	5.91	7.60	6.40	6.71	7.14	3.80	24.77	6.40	29.40	7.20
36	12.00	5.75	7.39	6.22	6.53	6.94	3.69	24.08	6.22	28.58	7.00
37	11.68	5.59	7.19	6.05	6.35	6.76	3.59	23.43	6.05	27.81	6.81
38	11.37	5.45	7.00	5.89	6.18	6.58	3.50	22.82	5.89	27.08	6.63
39	11.08	5.31	6.82	5.74	6.03	6.41	3.41	22.23	5.74	26.38	6.46
40	10.80	5.18	6.65	5.60	5.88	6.25	3.33	21.68	5.60	25.73	6.30

単位：cm

「設計」の推定　試みに、５尺を１区とする方眼(―線)を石室実測図に重ねると、玄室の長さは３区、羨道も３区、石列が尽きるところまでが４区に収まり、石室の全長は７区で設計されていたと見ることができる(図30)。玄室と羨道は、接続部分で主軸を異にしているが[*1]、７区一連の「設計図」を玄門立柱石(奥壁から３区目)で切り離し、方向を違えて継ぎ足した形(―線)となっている(図31)。

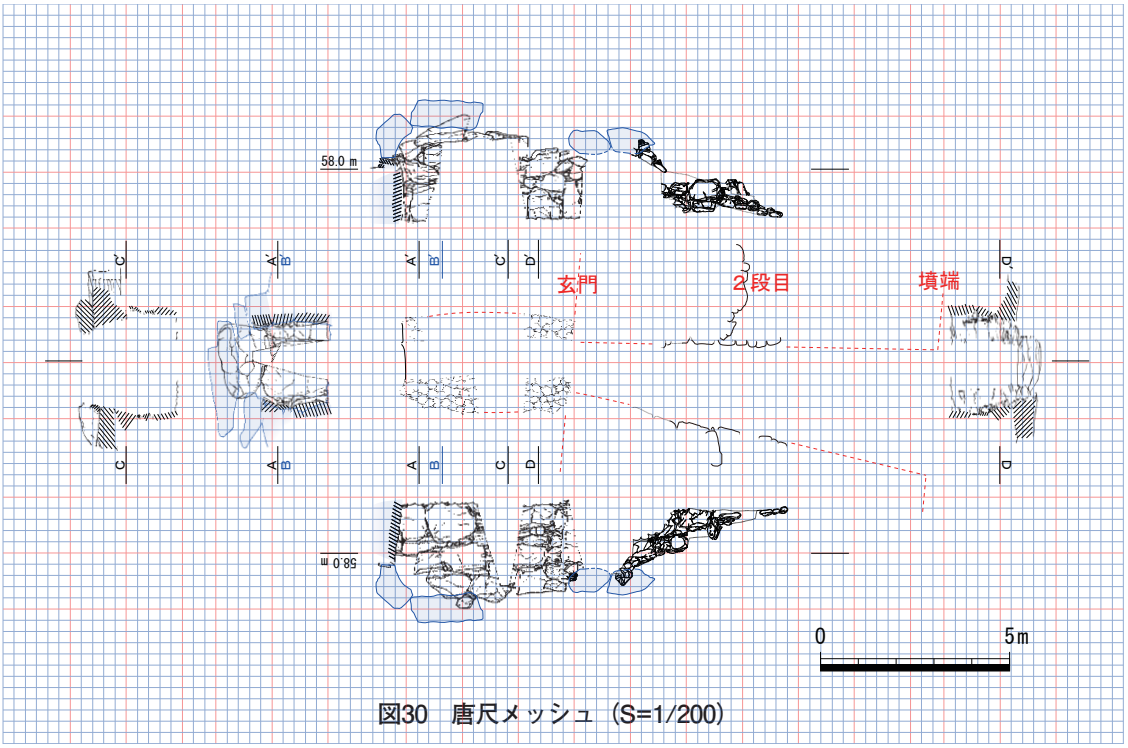


図30　唐尺メッシュ（S=1/200）

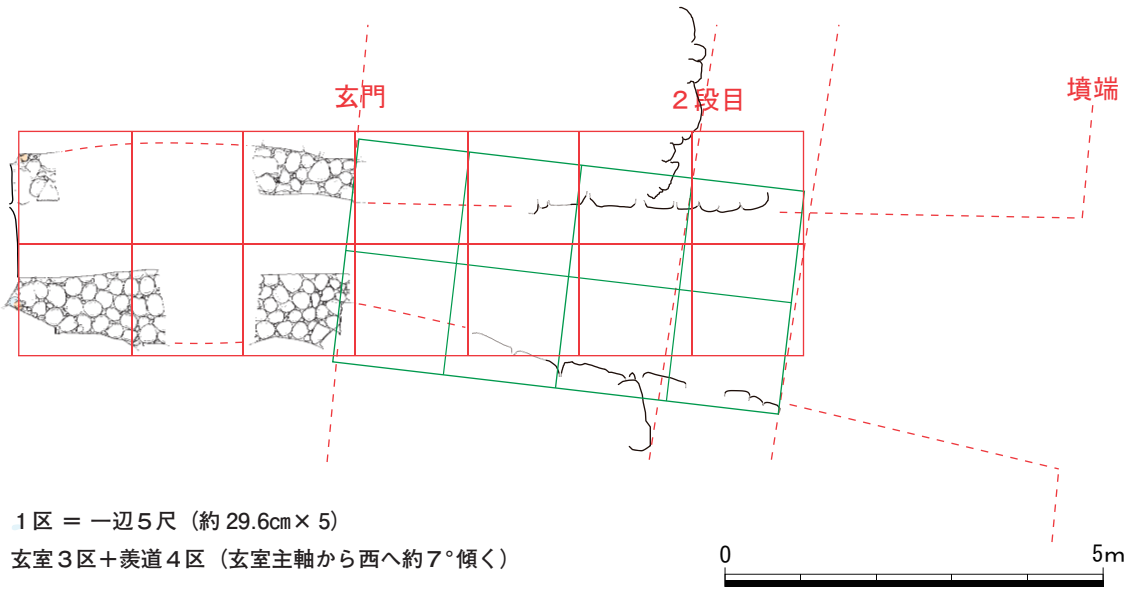


図31　設計図の推定（S=1/100）

＊1 玄門立柱石から入り口方向の４区分が玄室の主軸と比べ、南基準で約７度西へ振った形となっている。

2　石室と墳丘

石室と墳丘の関係　石室は、玄室の主軸と羨道の主軸が異なることが明らかになったが、それらと墳形の関係を見ると、墳丘前(南)面の墳端ラインは羨道主軸(―線)にほぼ直交し、西面は玄室の主軸(― 線)とほぼ平行の関係にあることが看取される(図32)。

羨道部の壁体から連続して左右(東西)に分かれて延びる石列は２段目の基底と考えられ、その延長に設けたＣ・Ｅトレンチにおいて、その東と西の角を確認することができた。この角と角を結んだラインは、玄室主軸とは明らかに斜交し、羨道主軸と直交する角度に近い。

これらのことから、想定される墳端を考慮しつつ、羨道主軸に沿う正方形(□)と玄室主軸に沿う正方形(□)（一辺が24.89m＝高麗尺70尺、２段目段はその半分）[*1]を当てて手掛かりとしたい。

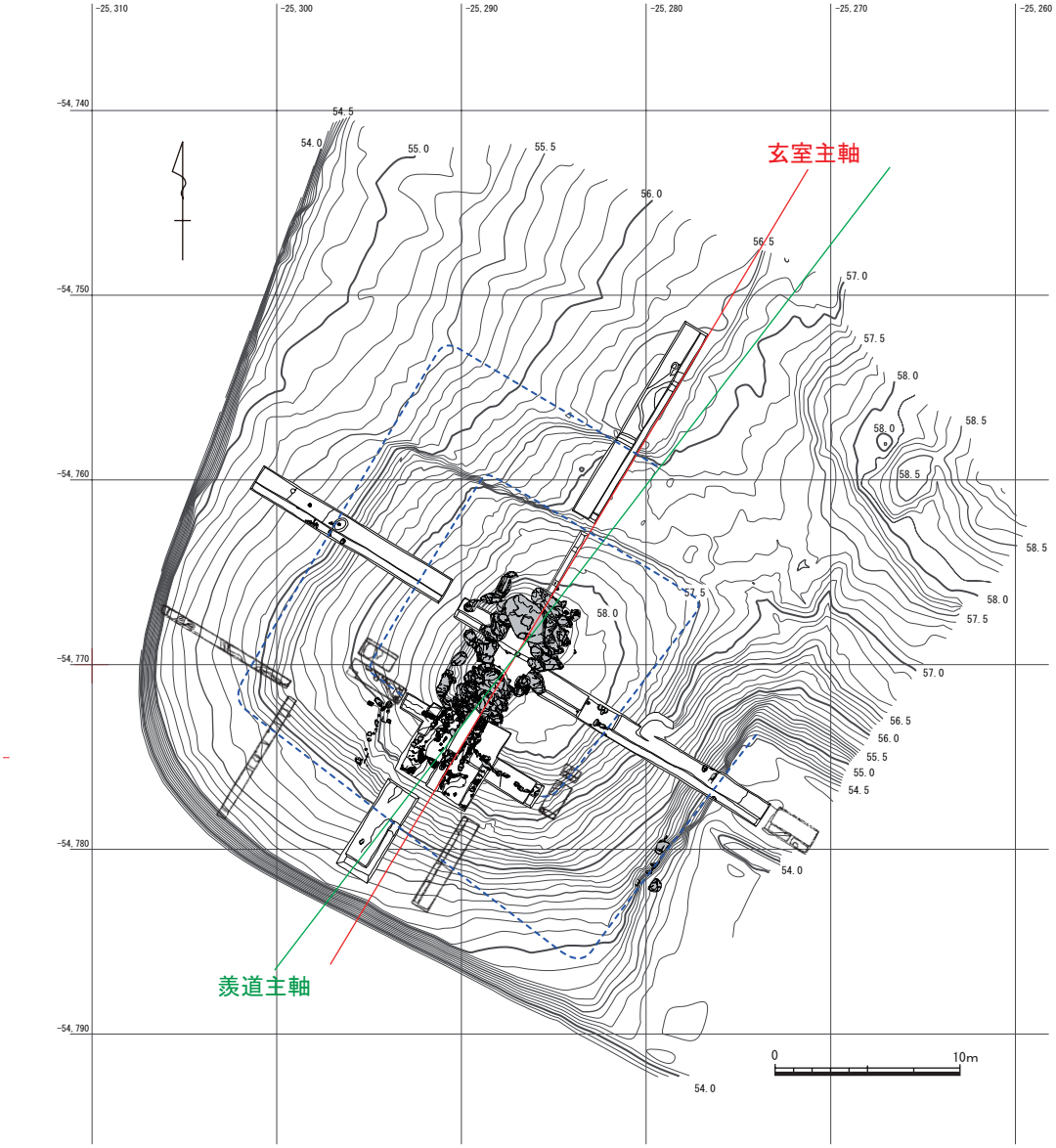


図32　墳丘復元案（S=1/400）

＊1 高麗尺(＝35.56cm)と唐尺(＝29.63cm)の方眼を当てて検討した結果、唐尺では完数が得られず、高麗尺では両方の主軸方向に合わせた場合のそれぞれについて、方70尺で部分的に説明できることから、ここでは作業仮説として高麗尺を基準とした。

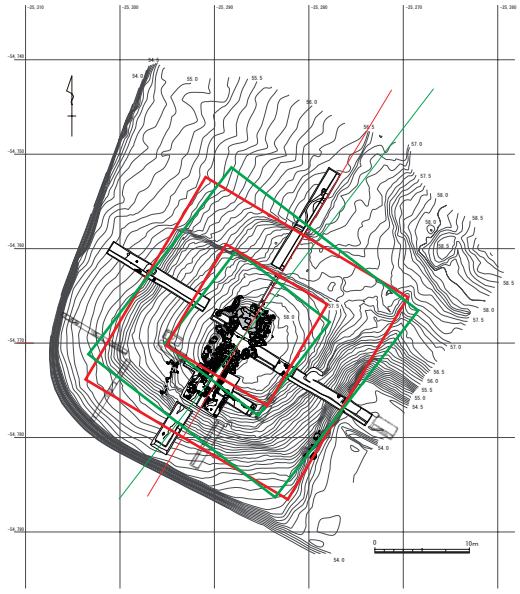


図33　高麗尺 方70尺・35尺（S=1/800）

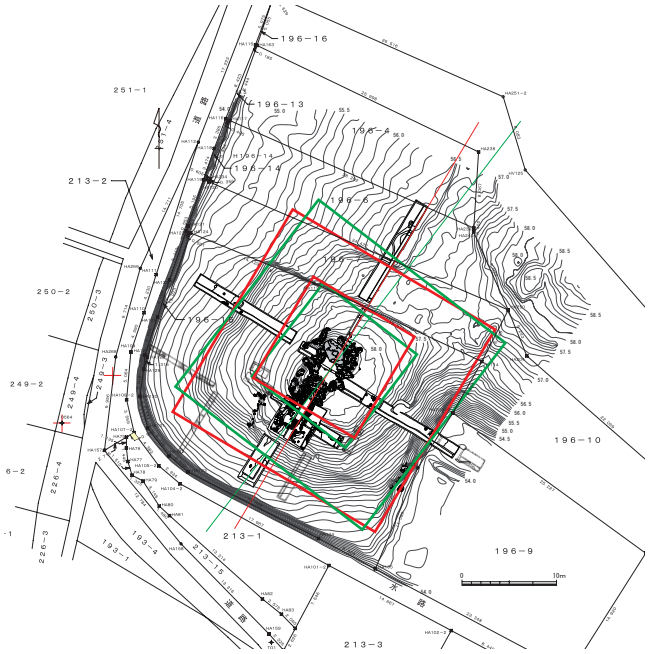


図34　字絵図と墳丘（S=1/800）

これを見ると、前(南)面と東面は羨道主軸(—線)と直角・平行の関係、西面は玄室主軸(—線)と平行の関係にあることがわかる(図33)。北面については、これまでの発掘調査では、墳端を示す情報が得られていない*1。そこで、参考に字絵図との関係を見ると、石室の在る筆とその北側に接する筆、さらにその北側の筆のそれぞれの境が玄室主軸を基準にした正方形(□)の１段目と２段目の位置に近い(図34)。法尻を境とする慣例に順って形成された地割りであるとすれば、元の地形、すなわち墳形を反映している可能性がある。

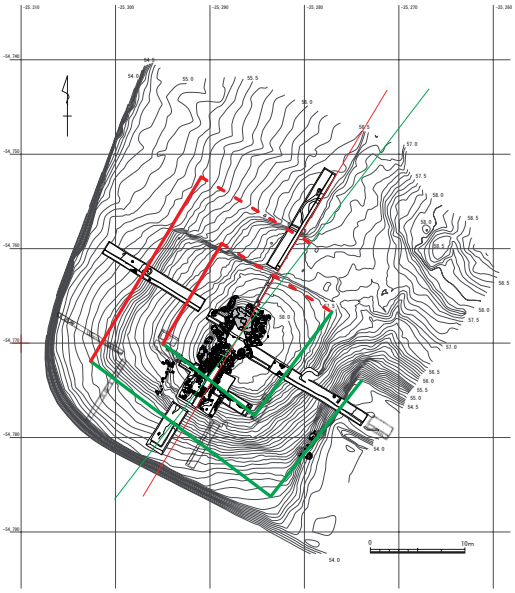


図35　石室主軸と墳丘の関係（S=1/800）

墳丘は丘尾から完全には切り離されておらず、山側は築成段(２段目の基底)と同じ高さで丘陵と繋がっていたと思われるが、全体としては玄室と羨道それぞれの主軸に沿った２つの正方形が合体した形、すなわち墳丘の北半分は玄室主軸に、南半分は羨道主軸に順った形となっている(図35)。

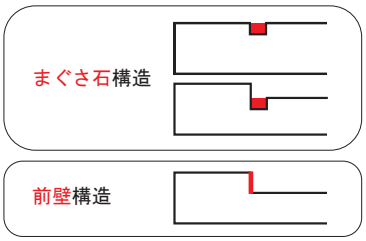
石室構築と墳丘築成の作業は同時に行われており*2、玄室と羨道の屈折に墳丘の形も連動している可能性がある。少なくとも羨道主軸と前面が直交することから、正面観を整えようとした意図は読み取れるが、或いは石室を構築する過程において、羨道の方向を定める段階*3に、技術的な問題など何らかの理由で設計変更があったのではないだろうか。

*1 角部において墳丘の基底に関わる情報が残されていないか。また、北側に壕が存在したか否かを確かめる必要がある。
*2 Ⅱ墳丘　２第２次範囲確認調査「Ａトレンチ」p.20
*3 Ⅲ石室　１玄室「玄門」p.40

3 長良川流域の横穴式石室 －池尻大塚古墳の特徴と位置づけ－

池尻大塚古墳の横穴式石室の特徴　池尻大塚古墳は、墳丘の盛土が削られ石室が露わになり、天井石は玄室部奥壁寄りに１石、羨道部に２石しか残っていないばかりか、側壁の一部も背後から矢穴が穿たれ持ち出された痕跡があり、後世の改変が著しい。しかし、閉塞石は荒らされた形跡がなく、その上に堆積した流れ込みの土層（図６　7～12層）が見られたことから、羨道部には入口側へ１ｍ程先まで天井石があったと思われる。失われたこれらの石材を加味して、発掘調査によって明らかになった池尻大塚古墳の横穴式石室の特徴をまとめると、

1 立柱石が置かれた両袖式石室で、袖が明瞭であること。
2 玄室は長方形で、やや胴張り形となること。
3 まぐさ石構造[*1]ではなく、前壁構造[*2]をとること。
4 玄室部と羨道及び前庭部の主軸が異なること。
5 羨道部から前庭部にかけて、「八」の字形に開くこと。
6 玄室で観察された目地[*3]から上は狭くなること。



立面形による分類の定義

以上の特徴のうち、袖の構造（１）、玄門天井部の構造（３）、前庭部の形（５）に注目して、長良川中流域の大型横穴式石室を持つ古墳と比較、検討する。

長良川中流域の後期古墳　長良川中流域で確認された古墳への横穴式石室の導入時期は６世紀の前半であり、関市陽徳寺裏山１・４号墳が挙げられる。その後、７世紀中ごろまで横穴式石室を持つ古墳の造営が続く。

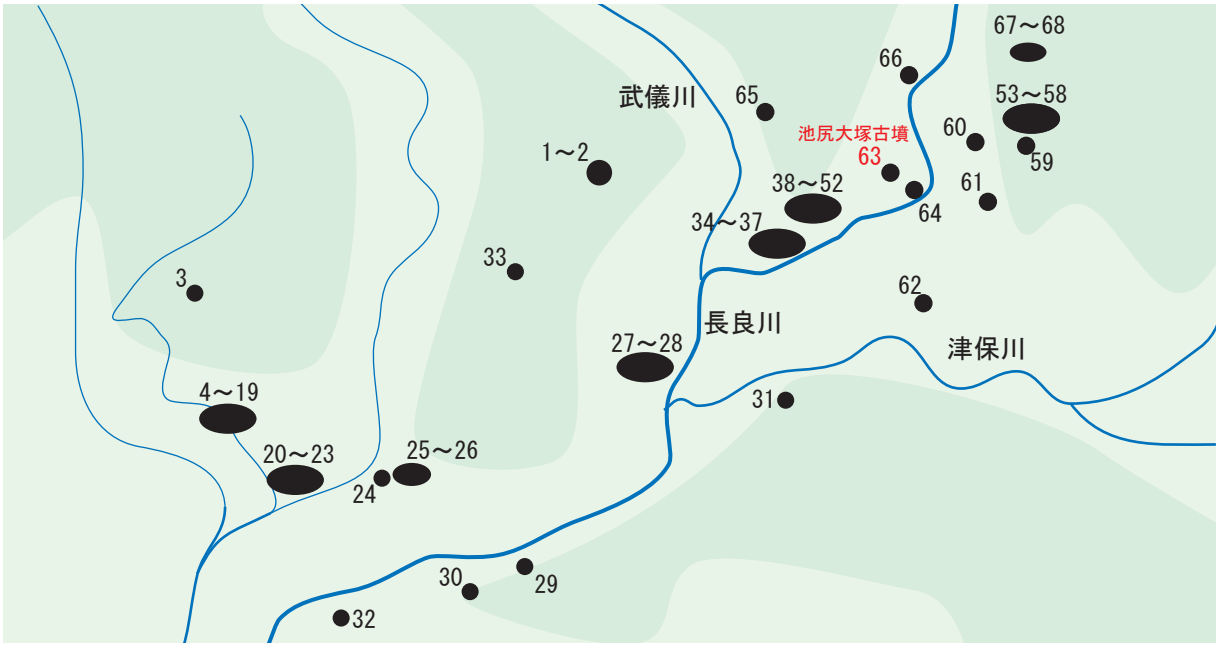


図36　長良川中流域の横穴式石室を持つ古墳の分布

＊1 ここで言う「まぐさ石構造」とは、玄門に架け渡された石材が、羨道及び玄室部の天井より突出して一段低くなるもの。
＊2「前壁構造」とは、玄門部の玄室側に羨道部より一段高くなった壁があるもの。
＊3 Ⅲ石室　１玄室「墓壙内の石積工」p.37

表13　長良川中流域の横穴式石室を持つ古墳一覧

	名称	所在地	大きさ（m）				袖石	袖の形	梱石	敷石	石室の形	楣石	備考
			全長	玄室長	玄室幅	羨道長							
1	大廻１号墳	岐阜市	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
2	大廻２号墳	岐阜市	8.8	3.5	1.4	5.3	○	両袖	×	×	長方形	−	
3	石谷１号墳	岐阜市	12.6	5.8	2.8	6.8	○	両袖	−	−	長方形	○	
4	上城田寺３支群５号墳	岐阜市	7.3	2.8	1.5	4.5	○	擬似両袖	×	−	長方形	○	
5	上城田寺４支群１号墳	岐阜市	3.5	3.5	0.8	−	×	無袖	×	×	長方形	−	塊石閉塞
6	上城田寺４支群２号墳	岐阜市	6.9	6.9	1.5	−	×	無袖	×	小石敷き	胴張り	−	
7	上城田寺４支群３号墳	岐阜市	3.4	3.4	1	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
8	上城田寺４支群４号墳	岐阜市	5.6	4.5	1.4	1.1	×	両袖	×	小石敷き	胴張り	−	塊石閉塞、排水施設
9	上城田寺４支群５号墳	岐阜市	6.2	2.7	1.2	3.5	○	両袖	×	×	長方形	−	
10	上城田寺４支群７号墳	岐阜市	3.1+	3.1	0.9	−	×	両袖	×	×	胴張り	−	
11	上城田寺４支群８号墳	岐阜市	6.4	6.4	1.3	−	×	無袖	×	小石敷き	長方形	−	塊石閉塞、敷石により玄室と羨道の区別
12	上城田寺４支群９号墳	岐阜市	2.2	2.2	0.8	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
13	上城田寺４支群 10 号墳	岐阜市	2.8	2.8	0.8	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
14	上城田寺４支群 11 号墳	岐阜市	2.7	2.7	0.6	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
15	上城田寺４支群 12 号墳	岐阜市	2.9	2.9	0.7	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
16	上城田寺４支群 13 号墳	岐阜市	3.2	3.2	0.9	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
17	上城田寺４支群 14 号墳	岐阜市	2.2	2.2	0.7	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
18	上城田寺４支群 15 号墳	岐阜市	2	2	0.5	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
19	上城田寺長屋１号墳	岐阜市	10.5	6	2.2	4.5	○	左片袖	×	小石敷き	長方形	−	
20	椿洞２号墳	岐阜市	5.1	3.6	1.4	1.5	○	両袖	○	×	長方形	−	
21	椿洞３号墳	岐阜市	4.6	2.8	1	1.8	○	両袖	×	×	長方形	−	
22	椿洞４号墳	岐阜市	5	2.6	1.2	2.4	○	両袖	○	×	長方形	−	
23	椿洞５号墳	岐阜市	3.5+	3.5	1.3	−	○	無袖	○	小石敷き	長方形	−	
24	岩崎１号墳	岐阜市	10.5	3.6	2.3	6.9	○	両袖	×	−	長方形	○	
25	西山４号墳	岐阜市	10	5.1	2.1	4.9	○	両袖	○	×	長方形	−	
26	西山５号墳	岐阜市	4.8	2.5	1	2.3	○	無袖	×	×	長方形	−	
27	七反田番場山７号墳	岐阜市	6	3.2	1.2	2.8	○	擬似両袖	○	小石敷き	長方形	−	
28	七反田番場山 10 号墳	岐阜市	1.8	−	0.6	−	×	無袖	×	小石敷き	長方形	−	
29	日野１号墳	岐阜市	9.1	3.2	1.6	5.9	○	両袖	○	−	長方形	○	
30	日野西山６号墳	岐阜市	5.5	3.3	1.2	2.2	○	右片袖	×	石敷き	長方形	−	
31	北山３号墳	岐阜市	5	5	1.1	−	×	竪穴系	○	×	長方形	−	
32	千畳敷古墳	岐阜市	7.3	7.3	1.2	−	×	無袖	×	×	長方形	−	
33	森古墳	山県市	9	4.3	1.6	4.7	×	擬似両袖	×	−	長方形	○	
34	陽徳寺裏山１号墳	関市	6	4.8	2	1.2	×	両袖	×	×	長方形	−	
35	陽徳寺裏山２号墳	関市	5+	5	1.3	−	×	無袖	×	小石敷き	やや胴張り	−	
36	陽徳寺裏山３号墳	関市	2.2+	2.2	0.7	−	○	無袖	×	×	長方形	−	
37	陽徳寺裏山４号墳	関市	4.3	4.3	1.6	−	×	無袖	×	×	胴張り	−	排水施設
38	塚原１号墳	関市	7.5	4.6	1.5	2.9	×	無袖	−	小石敷き	やや胴張り	−	塊石閉塞
39	塚原２号墳	関市	1.9	1.9	0.7	−	×	無袖	−	川原石	長方形	−	小石室
40	塚原３号墳	関市	3.8	3.8	0.7	−	×	無袖	−	×	長方形	−	
41	塚原４号墳	関市	−	−	−	−	−	−	−	小石敷き	−	−	
42	塚原５号墳	関市	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
43	塚原６号墳	関市	4.3	3.3	0.8	1	−	無袖	○	×	長方形	−	
44	塚原７号墳	関市	7.3	3.8	1.5	3.5	○	両袖	○	川原石	やや胴張り	−	羨門に立石
45	塚原８号墳	関市	6	3.1	1	2.9	○	両袖	○	川原石	やや胴張り	−	
46	塚原９号墳	関市	6.5	3.1	1	3.4	○	両袖	×	川原石	長方形	−	
47	塚原 10 号墳	関市	7.4	3.3	0.9	4.1	○	無袖	○	川原石	長方形	−	
48	塚原 11 号墳	関市	4.2	4.2	0.8	−	×	無袖	×	川原石	長方形	−	塊石閉塞
49	塚原 12 号墳	関市	2.9	2.9	0.9	−	×	無袖	×	川原石	長方形	−	塊石閉塞
50	塚原 13 号墳	関市	2.9	2.9	0.7	−	×	無袖	×	川原石	長方形	−	
51	塚原 14 号墳	関市	2.1	2.1	0.8	−	×	無袖	×	川原石	長方形	−	小石室
52	塚原 15 号墳	関市	1.3	1.3	0.5	−	×	無袖	×	川原石	長方形	−	小石室
53	砂行２号墳	関市	2.3+	2.3	0.8	−	○	−	×	×	長方形	−	
54	砂行３号墳	関市	1.7+	−	0.8	−	×	−	×	×	長方形	−	
55	砂行４号墳	関市	2.1+	−	−	−	×	−	×	×	長方形	−	
56	砂行５号墳	関市	0.6+	−	0.4	−	×	−	×	×	長方形	−	
57	砂行７号墳	関市	−	−	−	−	×	−	×	×	長方形	−	
58	砂行８号墳	関市	0.6+	−	−	−	×	−	×	×	長方形	−	
59	深橋前古墳	関市	4+	−	1.3	−	×	−	×	×	長方形	−	
60	松ヶ洞２号墳	関市	1.1	1.1	0.4	−	×	−	×	×	長方形	−	
61	杉ヶ洞１号墳	関市	9.6	6.1	1.9	3.5	○	右片袖	×	×	長方形	−	塊石閉塞、排水施設
62	一ノ門古墳	関市	2.7+	−	−	−	−	−	−	小石敷き	−	−	
63	池尻大塚古墳	関市	10.3	4.3	2.5	3	○	両袖	○	川原石	やや胴張り	前壁	
64	弥勒寺古墳	関市	0.8+	0.8+	1.1	−	−	−	−	−	−	−	
65	裏山１号墳	関市	8.75	3.32	1.47	5.43	○	両袖	−	−	長方形	−	
66	殿岡１号墳	美濃市	9.8	4.6	1.7	5.2	○	両袖	−	−	長方形	○	
67	塚穴１号墳	美濃市	8	4.2	1.5	3.8	○	両袖	×	小石敷き	やや胴張り	○	塊石閉塞
68	塚穴２号墳	美濃市	7.3	7.3	1.7	−	×	無袖	×	小石敷き	やや胴張り	−	塊石閉塞

長良川中流域の横穴式石室を持つ古墳の内(表13)、全長が９ｍを超える石室を持つ古墳は９基、玄室の幅が２ｍを超える古墳は６基を数えるが、この両方を満たす古墳は池尻大塚古墳の他には、岐阜市に所在する石谷１号墳、上城田寺長屋１号墳、岩崎１号墳、西山４号墳の４基のみとなる。

表14　長良川中流域の大型横穴式石室

	所在地	墳丘		石室				備考
		墳形	規模	規模	型式	奥壁	玄門の構造	
石谷１号墳	岐阜市	円墳	20m	12.6m	擬似両袖 (幅狭い)	鏡石	まぐさ石	
上城田寺長屋１号墳	岐阜市	円墳	15m	10.5m	左片袖 (立柱石で明瞭)	鏡石	不明	天井石は玄室の１石のみ
岩崎１号墳	岐阜市	円墳	20m	10.5m	擬似両袖 (立柱石、幅狭い)	大形石材２段	まぐさ石	大形石材使用
西山４号墳	岐阜市	円墳	15m	10.0m	擬似両袖 (立柱石だが不明瞭)	大形と長方形	不明	天井石は奥壁寄りの１石のみ

これを見ると(表14)、長良川中流域における大型横穴式石室に共通する特徴は、次の３点である。

１　玄門の構造が判るものは、まぐさ石構造となること。

２　袖部が不明瞭で、擬似両袖式のものが多いこと。

３　奥壁に大形の石材(鏡石)を置くこと。

池尻大塚古墳をこれらと比較すると、袖部が明瞭で玄門天井部がまぐさ石構造を採らないことが異なっており、長良川中流域における大型横穴式石室を持つ古墳の中にあって、特異な存在である。

美濃地域の後期首長墳の様相　次に美濃地域に範囲を広げて、大型横穴式石室を持つ古墳と池尻大塚古墳の比較を試みる。美濃地域では、各務原市大牧１号墳、可児市川合狐塚古墳を最期に前方後円墳の築造が終焉する。その後に築造される首長墳は、直径20～35m規模の円墳と一辺20～30m規模の方墳である(表15)。

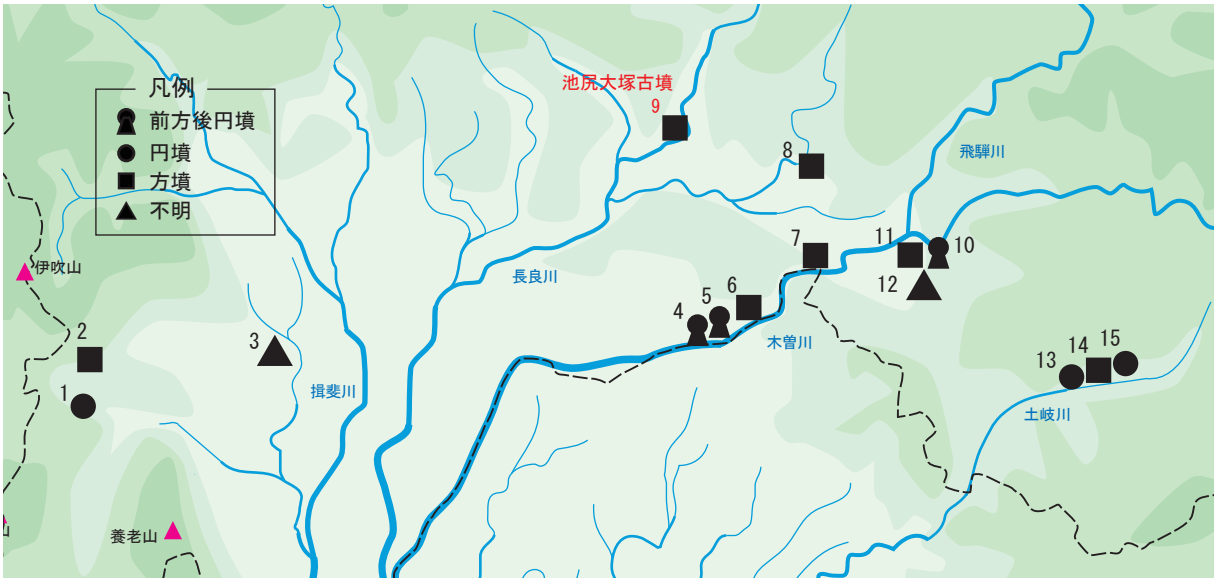


図37　美濃地域の首長墳の分布

西濃地域では、古墳時代後期の横穴式石室を持つ前方後円墳は確認されておらず、首長墳と考えられる後期古墳は、垂井町に所在する兜塚古墳と南大塚古墳が挙げられる。この２基の古墳の築造順序は、石材の大きさから兜塚古墳→南大塚古墳（TK217段階）と考えられており、兜塚古墳から南大塚古墳への変化は、前庭部が大きく「八」の字に開く段階を示す編年の指標ともなっている。

各務原地域では、首長墳と考えられる後期古墳は、前方後円墳のふな塚古墳と大牧１号墳、方墳の鵜沼西町古墳が挙げられる。これらの古墳の築造順序は、ふな塚古墳（TK43段階）→大牧１号墳（TK43～209段階）→鵜沼西町古墳（TK217段階）と考えられており、ふな塚古墳、大牧１号墳の規模は大きく、特に羨道から前庭部が長大である。大牧１号墳の石材は大形化し、鵜沼西町古墳の前庭部は、若干「八」の字に開いている。

加茂野地域では、古墳時代後期の横穴式石室を持つ前方後円墳は確認されておらず、首長墳と考えられる後期古墳は、方墳の富加町井高１号墳と坂祝火塚古墳が挙げられる。前者は石材の大形化が見られないTK209段階、後者は石材が大形化し、前庭部が「八」の字に開くTK217段階と考えられる。

可児地域では、首長墳と考えられる後期古墳は、前方後円墳の川合狐塚古墳と方墳の次郎兵衛塚１号墳、熊野古墳が挙げられる。これらの古墳の築造順序は川合狐塚古墳（TK43～209段階）→次郎兵衛塚１号墳（TK209段階）→熊野古墳（TK217段階）と考えられる。

土岐地域では、後期になると古墳の築造が顕著に増え、横穴式石室の編年が追いやすく、指標となる地域である。前方後円墳は確認されておらず、横穴式石室は熊野神社古墳（MT15～TK10段階）で導入され、沓掛古墳（TK10～43段階）に至ると全長9.5mの片袖式横穴式石室となる。次の段階（TK209段階～）の大型古墳としては、段尻巻古墳と乙塚古墳、炭焼古墳が挙げられる。一貫してまぐさ石構造を採るが、乙塚古墳の段階で石室、石材の大形化と前庭部が「八」の字に開く傾向が見られ、炭焼古墳に至ると横口式石櫛のような加工石材が用いられ、今度は石室規模の小型化が見られる。段尻巻古墳→乙塚古墳→炭焼古墳の築造順序が考えられる。

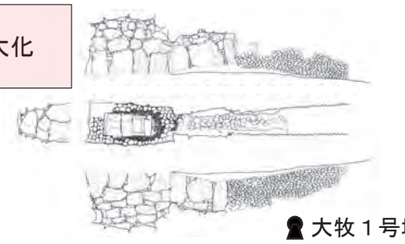
表15　美濃地域の後期首長墳

	名称	所在地	大きさ（m）					袖石	袖の形	梱石	敷石	石室の形	奥壁	楣石	備考
			全長	玄室長	玄室幅	羨道長	前庭部長								
1	兜塚古墳	垂井町	11.2	5.2	2.0	6.0	－	×	両袖	×	○	長方形	2段	○	円墳（35m）
2	南大塚古墳	垂井町	15.2	5.2	2.6	2.5	5.0	○	両袖	×	○	長方形（胴張り）	1段＋	－	方墳（25m）
3	車塚古墳	大垣市	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	円か方墳（24m）
4	ふな塚古墳（前方部）	各務原市	13.2	4.8	2.4	5.1	3.3	×	両袖	○	○	長方形	川原石積み	－	前方後円墳（45m）
5	大牧１号墳	各務原市	16.0	5.1	2.5	3.8	7.1	○	両袖	×	○	長方形	3段	○	前方後円墳（45m）
6	鵜沼西町古墳	各務原市	11.1	4.74	2.2	2.94	3.48	○	無袖	×	○	長方形	2段	－	方墳（20m）
7	火塚古墳	坂祝町	15.8	5.2	2.34	6.7	3.9	○	擬似両袖	×	○	長方形	1段＋	○	方墳（28m）
8	井高１号墳	富加町	11.3	前室 4.9 後室 4.8	前室 2.2 後室 2.0	1.6	－	○	擬似両袖	－	－	長方形（胴張り）	2段か	○	方墳（29m）
9	池尻大塚古墳	関市	10.3	4.3	2.5	3.0	3.0	○	両袖	－	○	長方形（胴張り）	2段	前壁	方墳（23～25m）
10	川合狐塚古墳	可児市	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	前方後円墳（63m）
11	次郎兵衛塚１号墳	可児市	15.5	前室 3.4 後室 4.1	前室 1.9 後室 2.1	4.2	3.8	×	擬似両袖	×	○	長方形	2段	○	方墳（29.5m）
12	熊野古墳	可児市	13.3	4.5	2.1	4.9	3.9	×	擬似両袖	×	○	長方形	塊石積み	－	円か方墳（31m）
13	段尻巻古墳	土岐市	9.1	3.6	1.6	2.8	2.4	○	擬似両袖	×	－	長方形	1段	○	円墳（20m）
14	乙塚古墳	土岐市	18.6	5.1	2.8	5.4	7.5	○	擬似両袖	×	－	長方形	1段	○	方墳（27m）
15	炭焼古墳	土岐市	7.53	前室 3	前室 1.5	3.16	1.37	○	擬似両袖	×	－	長方形	1段	○	円墳（16m）

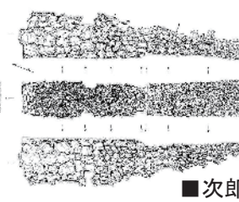
表16　美濃地域の横穴式石室編年

	西　濃	各務原	武　儀	加茂野	可　児	東　濃
TK43段階	羨道の長大化					
TK209段階						
TK217段階						

凡例（墳丘の形）
- 前方後円墳
- 円墳
- 方墳
- 不明

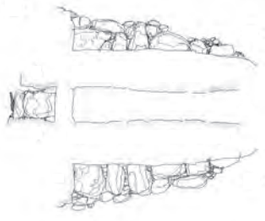


大牧１号墳

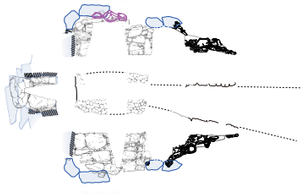


川合狐塚古墳

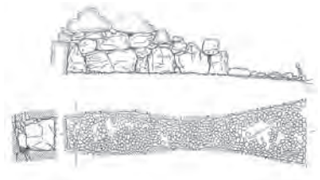
●兜塚古墳



■鵜沼西町古墳



■池尻大塚古墳



■南大塚古墳

■井高１号墳

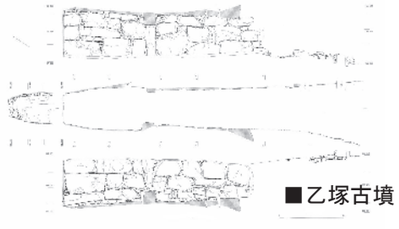
■次郎兵衛塚１号墳

●段尻巻古墳

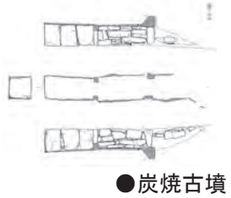
・石材の大型化
・前庭部が「八」の字に開く

■坂祝火塚古墳

▲熊野古墳



■乙塚古墳



●炭焼古墳

大牧１号墳は S=1/800
他は S=1/400

美濃地域における池尻大塚古墳の位置づけ　美濃地域における後期首長墳の特徴を挙げると、

1 まぐさ石構造となること。

2 明瞭な袖部を持つものは少なく、擬似両袖式が多いこと。

3 奥壁に大形の石材(鏡石)を置くものが多いこと。

4 複室構造の石室があること。

美濃地域に共通する横穴式石室の移り変わりには、池尻大塚古墳をはじめ、南大塚古墳、鵜沼西町古墳、火塚古墳、乙塚古墳にも見られた石材の大形化、前庭部が「八」の字に開くこと、長大化に最も顕著な画期を見出すことができる。これらに先行する古墳は、前庭部が短く直線的で、「八」の字に開いても僅かであることは前述のとおりである。石材の大形化も各地域で起こり、TK217段階から顕著に見られる。以上のことから、池尻大塚古墳の築造時期は、TK217以降、実年代では7世紀前半以降と結論付けられる。

また、池尻大塚古墳の横穴式石室には明瞭な両袖部が備わり、玄門天井部は前壁構造となる。長良川中流域では例がないばかりか、美濃地域に視野を広げても、明瞭な両袖部が備わる石室を持つ古墳は大牧1号墳のみであり、また、前壁構造を持つ例は皆無である。これらの特徴を捉えて「畿内系」石室と呼ばれ、これまで畿内との繋がりが議論されてきた。西濃地域や土岐地域は、「在地化の様相をみせながらも「畿内系」の特徴を保持し、畿内の横穴式石室と変遷の方向性が基本的に同調する[*1]」のに対し、池尻大塚古墳の場合は、「影響」や「系列」といった情報の伝わり方の実体が曖昧なものではなく、畿内中枢部との直接的な繋がりを背景に忠実に畿内の横穴式石室を導入し得たか、或いは畿内の工人が直接関与した蓋然性が高い。

---

*1 藤井康隆 2009「東海地方の「九州系」横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007年度熊本大会分科会Ⅰ記録集　杉井健編

〈**参考文献**〉

・成瀬正勝 1985「横穴式石室の型式と変遷について―特に美濃地域の場合―」『岐阜史学』79号　岐阜史学会

・中井正幸 1992「岐阜県横穴式石室研究序説」『花岡山古墳群』大垣市教育委員会

・牛丸岳彦 1996「乙塚古墳と段尻巻古墳について」『専修考古学』6号　専修大学考古学会

・横幕大祐 2001「美濃地方における後期古墳の状況」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会東海考古学フォーラム三河大会実行委員会　三河古墳研究会

・可児市 2005『可児市史』第1巻　通史編　考古・文化財　可児市

・瀬川貴文 2008「木曽川の水運と石室・石棺のひろがり」『東海の古墳風景』季刊考古学・別冊16　雄山閣

・藤井康隆 2005「横穴式石室採用パターンにみる地域性」『横穴式石室からみた濃尾の地域社会』勢濃尾研究会

・瀬川貴文 2010「東海西部における石棺の生産とその背景」『大阪大学文学部考古学研究室20周年記念論文集』大阪大学文学部考古学研究室20周年記念論文集刊行会

4 地方豪族から律令官人へ

美濃の伝統的古代豪族ムゲツ氏　ムゲツ氏は、名にし負う「ムギ」を本拠とした豪族であり、史料には牟義都、身毛、牟宜都、牟義津、牟義、武義、牟下など様々に表記される。[*1]『古事記』、『日本書紀』によれば、父方を天皇家に、母方を美濃国造とする祖先伝承を持ち、また、『上宮記』にみえる継体天皇の系譜には、祖母が「牟義都国造伊自牟良君女子」とある。ムゲツ氏が大王家と深く結びついた「伝統的地方豪族」[*2]と呼ばれる由縁である。『日本書紀』雄略天皇七年(463)八月条にみえる「身毛君大夫」が吉備に派遣された記事からは、ムゲツ氏が大王家の軍事力の一翼を担っていたこともうかがえる。

最も有名な記事は、「村国連男依」、「和珥部臣君手」、「身毛君広」ら美濃出身の３人の舎人に「不破の道を塞ぐ」詔が下された『日本書紀』天武天皇元年(672)六月壬午条であろう。時代は下るが『延喜式』「主水司」では、宮中の若水に関わる祭祀において「牟義都首」が儀式を司ることが規定されている。[*3]

これら史料にみるムゲツ氏の姿は、まさに大王家と直接繋がる氏族であり、古くから軍事の一翼を担い、古代国家成立に関わる重要な局面で天皇家を支え、宮中における祭祀においても重要な役割を演じている。

『日本書紀』雄略天皇七年八月条

官人吉備弓削部虚空、取急に家に帰る。吉備下道臣前津屋、或本に云はく、国造吉備臣山といふ。虚空を留め使ふ。月を経るまで京都に聴し上らせ肯へにす。天皇、身毛君大夫を遣して召さしむ。（後略）

『日本書紀』天武天皇元年六月壬午条（六七二）（二十二日）

村国連男依、和珥部臣君手、身毛君広に詔して曰はく、「今聞く、近江朝庭の臣等、朕が為に害はむことを謀る。是を以て、汝等三人、急に美濃国に往りて、安八磨郡の湯沐令多臣品治に告げて、機要を宣ひ示して、先づ当郡の兵を発せ。仍、国司等に経れて、諸軍を差し発して、急に不破道を塞げ。朕、今発路たむ」とのたまふ。

『延喜式』主水司

御生気御井神一座祭

（中略）

右随二御生気一、択二宮中若京内一井堪レ用者一定。前冬土王。令二牟義都首潔治一即祭之。至二於立春日昧旦一。牟義都首汲レ水付レ司擬二供奉一。一汲之後廃而不レ用。

『新修 関市史 史料編より』

*1 弥勒寺西遺跡から墨書土器「身月」が出土しており、これも「ムゲツ」の表記の１つと考えられる。
関市教育委員会 2007『弥勒寺遺跡群 弥勒寺西遺跡－関市円空館建設に伴う発掘調査－』Ⅲ１墨書土器「習書」p.34
*2 野村忠夫 1967「村国連氏と身毛君氏－壬申の乱後における地方豪族の中央貴族化－」『律令官人制の研究』吉川弘文館
*3 水辺の祭祀の司祭者としての姿は、弥勒寺西遺跡の祭祀跡で具体的に見ることができる。前掲*1

美濃の方墳　美濃における古墳時代後半から終末期における方墳は、１辺21m以上の大型グループ、13m以下の小型グループ、そして両者の中間的位置にある１辺14～18m程の中型グループに分けられる。大型グループは単独で立地する傾向が強く、小型グループは群集する傾向が強い。[*1]

分布を見ると次の４つの地域に分けられる（図38）。揖斐川筋の南大塚古墳と櫨山古墳群、東･西中尾古墳群。長良川筋の池尻大塚古墳を中心とする八王子古墳、御前塚古墳、小瀬方墳、殿岡古墳群と井高１号墳。木曾川筋右岸の鵜沼西町古墳、火塚１号墳、蘇原東山古墳群と左岸の広見熊野古墳、次郎兵衛塚１号墳を盟主とする（宮之脇古墳群も含む）川合遺跡群。土岐川筋の乙塚古墳と定林寺東洞古墳である。

池尻大塚古墳は、その規模において首長墳と評価できる大型のグループに属し、単独で立地している。[*2] 揖斐川筋の方墳は、単独で立地する南大塚古墳以外は６世紀後半から７世紀後半にかけて群集する小･中型グループの方墳群である。方墳に限らず、畿内系の暗文土師器の副葬が多いことも示唆的な特徴として特筆できる。[*3] 木曾川筋の方墳は、右岸の各務原地域と左岸の可児地域に分布が分かれるが、後者の川合遺跡群では、５世紀後半の宮之脇１号墳から７世紀前半の次郎兵衛塚５号墳まで、方墳の系譜が追え、７世紀を前後して突如として首長墳が方墳に移行した他地域とは異なり、その土壌が潜在していた可能性と壬申の乱以前の美濃の地域間の状態を予察する有効な視座となることが指摘されている。[*4]

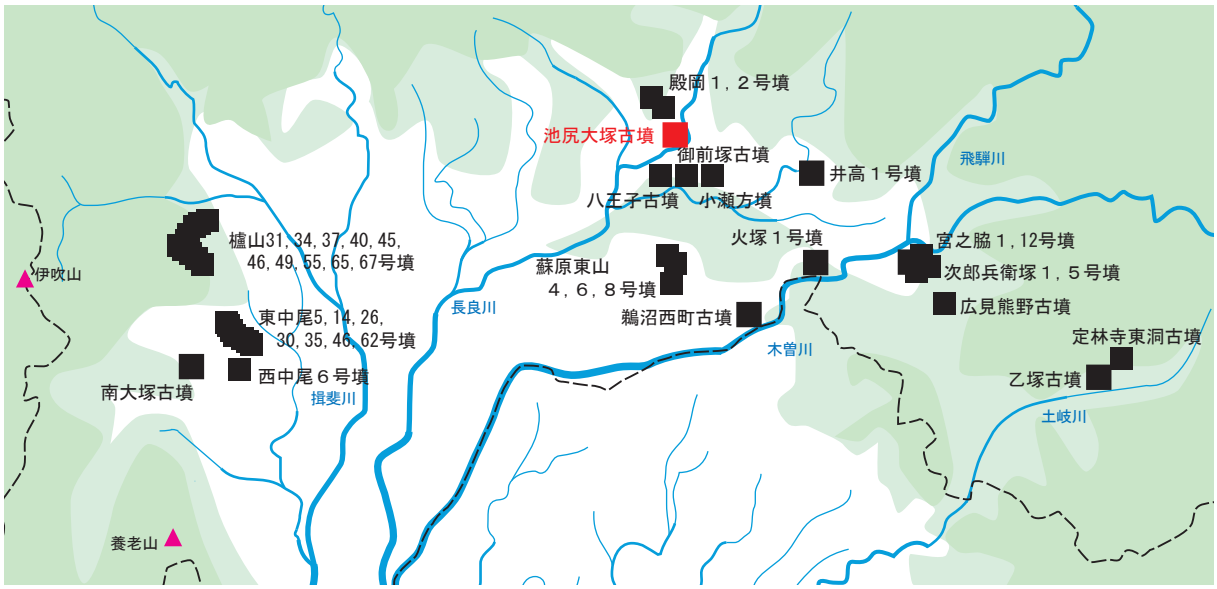
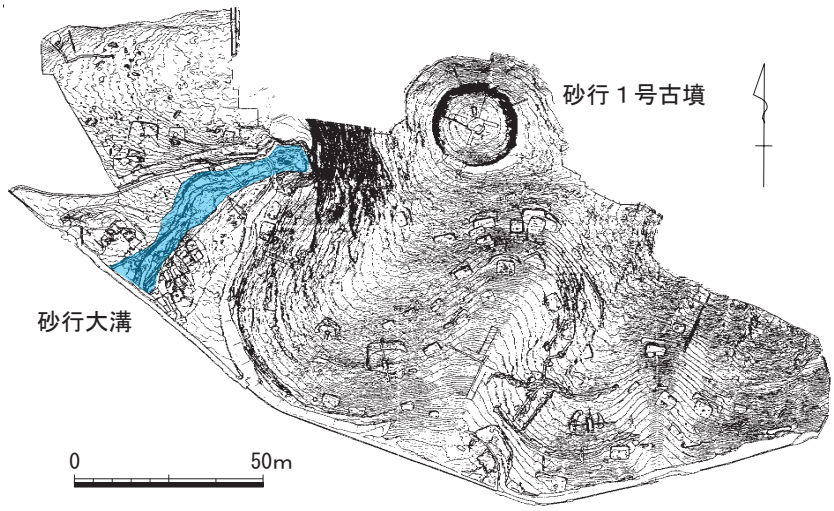


図38　美濃地域の方墳の分布（古墳時代後半期　５世紀後半～７世紀）

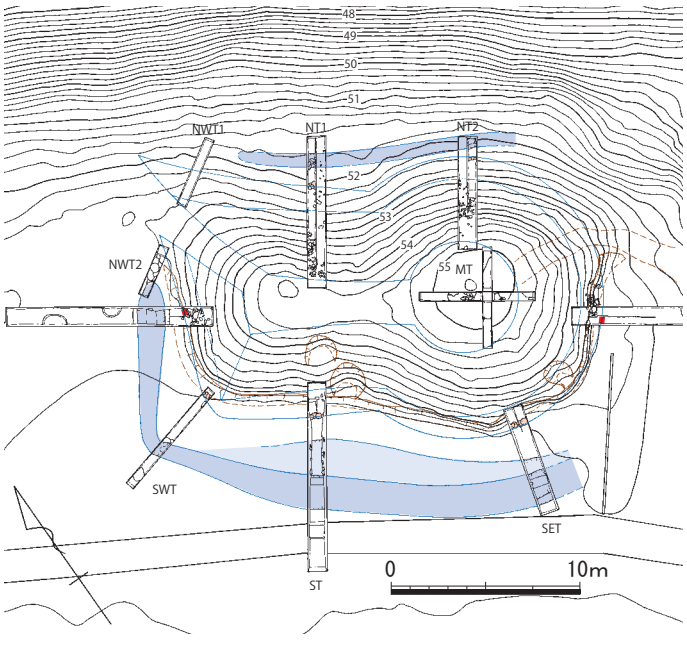
＊1 横幕大祐 2002「美濃における方墳」『美濃の考古学 第５号』美濃の考古学刊行会　美濃市殿岡古墳群の研究３－２号墳の墳丘測量報告－ 清山 健ほか
＊2 ただし、背後の池尻山麓には池尻大塚古墳の他に少なくとも３基の小円墳が分布している（仮称「池尻古墳群」）。詳細は不明であり、確認調査が必要である。
＊3 横幕大祐 2008「後期古墳時代の池田地域」『櫨山古墳群 確認調査報告書』池田町教育委員会　第５章 第３節
最終段階の被葬者層が「律令官人制の中に組み込まれていく性格」を想定。
＊4 長瀬治義 1994「方墳の分布と意義」『川合遺跡群〈本文編〉』可児市教育委員会 第５章 川合古墳群

「ムギ」地域の特性　武義郡衙周辺には数キロの範囲に単独で立地する方墳が分布し、郡衙造営氏族に比定されるムゲツ氏の趨勢と密接に関わっていると考えられる。このことは、弥勒寺東遺跡が明らかになる以前から、弥勒寺跡との関係で注意されてきた。長良川の中流域（ムギ地域）には古墳時代前期・後期を通じて、古墳の規模に関して言えば、際立って大型化する動向は見られず、他地域のように、いわゆる首長系譜の連続や断続といった議論の外にあった。他方、７世紀に至り、突如として大型方墳が出現した劇的な変化が強調され、方墳の築造から古代寺院造営という新しい政治社会の動向に対応した地域であるという説明が半ばステロタイプ化している。[*1]

方墳の出現以前に大型の古墳、特に前方後円墳がないことを以て、ムゲツ氏（支配者）の不在と「ムギ」地域が領域として成立していなかったということにはならない。



砂行遺跡（S=1/2,000）



片山西塚古墳（S=1/400）

1996･97年に調査された砂行遺跡では、祭祀の跡（総延長50ｍを超える砂行大溝）とその湧水点直上に立地している砂行１号古墳（径22ｍの円丘部に幅6.4～８ｍ、長さ4.1ｍの突出部を持つ帆立貝式古墳、５世紀前半と推定される）が発見された。古墳時代中期において水辺の祭祀と古墳祭祀が連動していた可能性が高いことが指摘されており、その実修者が地域を支配した首長層であることやムゲツ氏との関わりが論じられている。[*2]

また、2003年に実施された「ムギ」地域における唯一の前方後円墳である片山西塚古墳の確認調査では、墳長22.3ｍと小規模ながら、前方部の片方が墓道となり、もう片方が「隅切り」となっている墳丘の構造が明らかになったほか、後円部と前方部が同じ高さまで盛られた土と後円部の最終段階の盛土に差異（工程に時間差）が認められることから、被葬者自らの選地による寿陵であった可能性や

＊1 渡辺博人 1992「関地区」『前方後円墳集成 中部編』近藤義郎編 山川出版社 第２部 地域の概要 第13章 美濃
＊2 成瀬正勝ほか 2000『砂行遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター

殯の期間が想定されている。後円部においては、竪穴系の主体部(主たる墓壙の他にもう２つの「墓壙？」)があることも確認されたことにより、従来考えられていた築造年代(６世紀前半)は５世紀の中葉に遡る可能性が指摘されている。[*1]

これらは、「大型化」の方向性を採らない「ムギ」地域の特性を示す事例として注目される。

大形前方後円墳が「ムギ」地域に分布しない背景は、史料にみられるムゲツ氏の姿を投影すれば、大和の政権と祖霊祭祀を共有することで「擬制的同族関係」[*2]を結ぶ必要のない、まさに「同族」であったことや、中央政権がその力を怖れて「同盟の証」としての大形前方後円墳の築造を許す必要のなかった地域と解釈することができる。

武義郡には『延喜式神名帳』に記載された式内社がない。これも似た事象として捉えることができる。令制以前の「ムギ」地域の神祇的祭祀(在地の様々なカミマツリ)は、砂行遺跡が示唆するようにこの地域の首長(ムゲツ氏)が既に掌握するところであり、「式内」すなわち律令下に置き、管理する必要がなかったと言うことができないだろうか。このような「ムギ」地域の特性については、史料に表れたムゲツ氏の性格や、明らかになりつつある池尻大塚古墳、弥勒寺西遺跡を含む弥勒寺遺跡群の内容、周辺の遺跡の動向を踏まえて、今後も検討が必要な課題である。

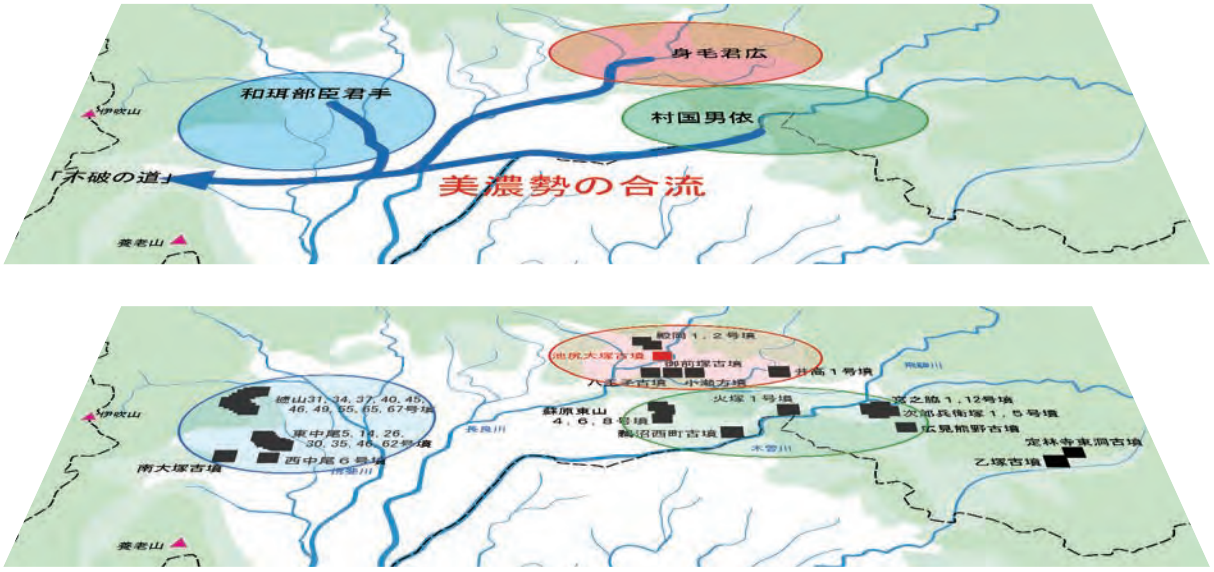


図39　「不破の道」をめざした美濃勢

方墳の分布から読み取ることができる律令体制への胎動は、壬申の乱で揖斐川、長良川、木曽川を恃んで「美濃師三千」(美濃の兵士３千人)を動員した３人の舎人の「不破の道」を目指した動向と象徴的に重なる。

大型方墳に葬られた各地域の首長層が、壬申の乱を経て評(郡)制に組み入れられていく過程[*3]の１つの具体を実際の遺構に見ることができる弥勒寺遺跡群と池尻大塚古墳の意義は大きい。

＊1 関市教育委員会 2008「５ 片山西塚古墳」『関市市内遺跡発掘調査報告書 平成15～17年度』
＊2 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
＊3 長瀬治義 2002「方墳の領域～律令前夜の美濃と飛騨～」『美濃の考古学 第５号』美濃の考古学刊行会

作業風景写真集　発掘調査は石室の一部を解体して行うという大がかりな仕掛けで、保存目的の調査としては前代未聞の難事業となった。何より安全の確保に腐心した。

調査後は、玄室内の環境をできるだけ無機質な状態に保つために山砂に置き換えて埋め戻し、取り外した石材は元どおりに復旧した。

無事に作業を終えることができ、従事した全ての方々に感謝したい。

仮設クレーン搬入路と覆屋

発掘作業

八賀 晋先生調査指導 2011.9.27

床面到達

埋戻し（山砂）

石室復旧（測量）

完了（植生土嚢）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くにしていしせき みろくじかんがいせきぐん みろくじひがしいせき
書 名	国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 **弥勒寺東遺跡**
副 書 名	第１部 館・厨区域ほか / 第２部 池尻大塚古墳
巻 次	Ⅲ
シ リ ー ズ 名	関市文化財調査報告
シリーズ番号	第34号
編 著 者 名	田中弘志　林 和範　李 浩基　森島一貴　加納英子
編 集 機 関	関市教育委員会
所 在 地	〒501－3894　岐阜県関市若草通３丁目１番地　TEL. 0575－22－3131
発 行 年 月 日	西暦2015年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弥勒寺東遺跡	岐阜県 関市池尻 字弥勒寺	21205	G27S07255	35°30′11″ ～ 35°30′09″	136°53′46″ ～ 136°53′53″	1994. 4 .26 ～ 2005.11.22	約9,838㎡	史跡整備
池尻大塚古墳	〃 字東屋敷	〃	G27S04142	35°30′22″	136°53′16″	第１次 2008. 5.21～12.24 第２次 2011. 7.21～10.19	103.0㎡ 33.6㎡	保存目的

	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥勒寺遺跡群 池尻大塚古墳	古墳時代	古墳	方墳・横穴式石室	須恵器、土師器、 鉄地金銅張飾金具	「弥勒寺」造営氏族の奥津城
	飛鳥・白鳳時代	豪族居宅・ 官衙(評衙)	竪穴建物 掘立柱建物 鍛冶遺構	須恵器、土師器 釘・鉄滓・フイゴの羽口・ 砥石	「弥勒寺」造営氏族の居宅 評衙
国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺官衙遺跡 (弥勒寺東遺跡) 弥勒寺跡 丸山古窯跡 (2007.2.6指定)	奈良時代 ～ 平安時代	官衙(郡衙)	掘立柱建物（郡庁院を構成する建物群、正倉群 等） 礎石建物（正殿身舎、正倉） 掘立柱塀（郡庁院囲繞施設） 溝（正倉院区画溝） 竪穴建物	須恵器 土師器 灰釉陶器 緑釉陶器 釘、刀子、紡錘車 製塩土器 炭化米	武義郡衙
	鎌倉時代 ～ 室町時代	中世墓群	土壙墓 溝	山茶碗、土師質土器 中国製陶磁、古瀬戸、和鏡 刀子	共同墓地

要　約

池尻大塚古墳

池尻山の支尾根の裾に造られた古墳で、弥勒寺遺跡群の西端に位置する。石室の石材が露出しており「美濃の石舞台古墳」とも呼ばれている。2008年(平成20)と2011年(平成23)に墳丘の調査と、2011年には天井石を取り外して、石室内部の発掘調査も行った。これによって、規模は一辺が約23m～25mで、２段に築成されていた可能性があり、前面をやや西に傾けた不整な方形をしていることがわかった。

石室内の調査は、玄室の床面積の30%程度にとどまったが、石室の規模、構造が明らかとなり、奥壁の両側床面に埋設された土師器の小壺と須恵器(坏蓋)、鉄地金銅張の飾金具が出土した。

弥勒寺東遺跡

国指定史跡 弥勒寺跡の東側に展開する、古代～中世の複合遺跡。

古代の遺構は、美濃国**武義郡衙**に比定される。

郡庁院　東西約50m、南北約60mの掘立柱塀に囲繞され、正殿、脇殿が「品」字形に整然と立ち並び、３時期の変遷がとらえられる。また、その周辺に、曹司域を伴っていたと考えられる。

正倉院　南北約40m、東西約130mの溝によって区画され、当初は９棟の倉庫が柱筋を揃えて一直線に並んでいたと思われる。３時期の変遷がとらえられ、変遷の過程で、特別に大きく立派に造られた倉(「法倉」)がある。

館・厨区域　大形の掘立柱建物や竪穴建物が存在し、今後の調査の進展によって、郡衙を構成した全ての施設とその変遷が明らかになる可能性がある。

豪族居宅・評衙　さらに下層にも大形の掘立柱建物や竪穴建物が存在する。

追加指定　2007年２月、弥勒寺跡に追加指定を受け、史跡の名称は、「弥勒寺官衙遺跡群　弥勒寺官衙遺跡　弥勒寺跡　丸山古窯跡」に改められた。

関市文化財調査報告第34号

国指定史跡　弥勒寺官衙遺跡群

弥勒寺東遺跡Ⅲ

－ 第１部 館・厨区域ほか / 第２部 池尻大塚古墳 －

2015年３月　発行

編集・発行　　関 市 教 育 委 員 会
〒501-3894　関市若草通３丁目１番地
TEL（0575）２２－３１３１㈹
印　　刷　　協 同 印 刷 株 式 会 社